

---

## 第7章

### 参加者の声

## 青山泰司

今こうして、JASC 中につけていた日記をパラパラと見返してみる。言葉の断面から感じられる感情の中で、凜とした存在感を放ち、目に留まるものがある。非日常に対する新鮮な驚きと言葉の壁を越えられないことへの悔しさ。ただそれを具に言語化することに抵抗を覚えるのは、ひどく主観的な満足や陶醉をいたく陳腐で凡庸なものに変質させることを少し恐れているからなのかもしれない。

何もかもが未知なるもの。日々ルーティーンの中を生きていた僕には、この上なく目新しく、心を躍らせる。

「もうこんなチャンスはない」という想いといまだ知らぬものへの好奇心が僕を掻き立てる。「とりあえず、やってみよう！」

この1ヶ月意識や無意識に関わらず心の内にずっとあった想い。

一方で、相手の想いを完全に理解できないことへの未練。ただこの想いもまた僕を大きく育ててくれる不可欠な栄養源だ。

環境が人を育てると良く人は言うけれど、これほど、刺激的で魅力的な環境の下におかれて生きたのはひさしぶりだ。

正直に言ってこれまでアメリカという国家が好きかといわれればそうではなかった。国際社会の世論に耳を閉ざし、裸足でどかどかと他国の主権の中に入り込むかの行為は、反国際協調的におもえた。ただ、論壇がいかにか極言しようと、政治がいかにか強談しようと、心の琴線に触れる僕らだけの交流は絶やしたくない。ずっと繋がってみたいと心からそう思えた。自分の上に背負っているものを少し取り払って、ひとりのひととして。

## 池田早紀

JASC に参加する前の私は...

小さい頃からアメリカに憧れを抱いていた。スケールのかさ、研究への投資、医師の質の高さ、いろんなテクノロジー発祥の地。い

つか数年アメリカで働き、新しい技術を日本に持って帰りたいと思っている。でもアメリカにはほとんど行ったことがなく、アメリカがどのような国なのか知らなかった。

医学部の仲間としか話す機会がほとんどなかった。違う価値観や違う夢をもった同年代の学生と話す機会がほとんどなかった。でも将来患者さんはいろんな background を持つ人なのでいろんな分野の学生と話す機会を切望していた。

小4から中3まで英国に滞在していたのだが、英語力以外でその経験を活かすことが通常の生活ではほとんどなかった。自分の経験を他人に伝えたい、そして英国以外の文化に触れて違う人と視点からみてみたい、そう思っていた。

そのような私が、たまたま JASC のポスターを発見したとき、一目ぼれをする感覚で行きたいと思ったのは必然的なことなのだと思う。そして、刺激的な1ヶ月は、じわじわと私の人生に影響を及ぼしている。

### 元気 300%

JASC 中、私は仲間と一緒に思うぞんぶんはしゃいだ。まるで高校の頃のころのように。ふざけあい楽しむ機会 JASC にはたくさんあったのだ。日本のアニメのキャラクター大集合の Skit をしたり、Talent Show でアカペラをしたり、ドッジボールをしたり、Crazy Club という変人のあつまったグループを結成してふざけたり...。そう、Crazy Club の President であり、運営委員でもある Rachel とは意気投合してはしゃいだ。普通の通りで歩きながらバレリーナっぽいダンスを一緒にしたり、街中で Crazy Club(CC)のテーマソングを作って振り付けも披露したり、San Francisco の Angel Island 行きのフェリーではタイタニックごっこしたり、道で大声で歌ったらホームレスに声かけられたり...かなりの迷惑行為もした気もするが CC の活動は本当に楽しかった。笑いすぎて腹直筋が鍛えられた。

### 知識不足による劣等感、そして前進

春合宿や事前合宿、そして本会議中、私は自分の知識のなさを感じるが多かった。いかに自分の視野が狭かったのか思い知らされた。

帰国子女で理系の私は帰国直後、高校で文型科目に力を注ぐ余裕がなかった。英国でも通信教育で日本の社会を勉強し、現地校で社会の勉強もしていたが、政治・経済・世界情勢については年齢的に学習しなかった。私はこれらのことと、大学生活での忙しさを言い訳にして、専門外のことを学習することを怠っていた。しかし、知らなくてはいけない、学びたいという気持ちは常にあった。

JASC では、視野の広い仲間や大学で政治や経済、法を専門とする学生と交流することができ、数あるフォーラムや講演、museum や monumentなどを訪問して新しいことを学ぶことができた。自分の無知や他の学生の知識や考えの深さを知って、私は劣等感を感じるものがしばしばあった。また、自分の専門からかけ離れていても、知識があり、講演でもたくさん質問ができるアメデリに感心していた。

そんな私が自分のだめさに落ち込んでいたとき、まわりの仲間がアドバイスをしてくれて、前向きに考えられるようになった。これらの新しい経験が、新しいことを学ぶ foot in the door になれたらいいのだと考えられるようになったのだ。それ以降、心が軽くなった。

そして、自分には知識はないけれども、それ以外の部分で貢献することに努め、役割を果たせたと思う。Skit や Talent show はもちろんだが、Trilateral Forum で moderator をし、Conflict Resolution のフォーラムでは Small Discussion を受け持ち、夜の Special Topics では”What kind of Men and Women are popular in US and Japan”という企画を Tierney とした。楽しみながら頑張れた自分や、背中を押してくれたみんなに感謝したい。自信がついたと思う。

### 大切なパートナー

さてさて、私の buddy, Tierney ついて述べようと思う。Cornell University で迎えてくれて、大学の寮やホスト先も一緒に、一緒に企画をしたりもした。私は彼女を本当に尊敬する。強く(彼女は karate をする)、しなやかで、知性があり、教養があり、芯がしっかりしている。それなのに、ときには奇声をあげ、馬鹿騒ぎも一緒にしてくれる。本当にバランスのとれた子だ。大学では副専攻の日本語の他に Gender Physiology を勉強しているので、女性の労働環境についての話題には火がついた。”I’ll improve the working environment of Japanese female doctors!”と私は彼女に約束した。Every moment spent with her が楽しかった(いつも彼女と一緒にいた、BF の Geoff にはときどきやきもちをやいていた笑)。彼女と深く議論したり、不安なことを相談したことを忘れない。彼女は私にとって大切なパートナーとなった。

### SS ファミリー

私の分科会、Science and Society Roundtable は家族だ。EC の Stanton とまちゃがママとパパで7人の子供と一匹の猫で構成されている。JASC の3分の1は一緒に過ごした。摩擦が生じることもあるが、深い議論を通して、本当の家族のようになれたと思う。「生命倫理」の様々なトピックに関するお互いの考えをもっと交換できたらよかった。



### これから

JASC が終わってしばらくは燃え尽き症候群や寂しさで、無気力だった。本会議が終わって2ヶ月近くがたった今では、私は前と同じような単調な日々を過ごしている。夏の経験を活かすかどうかは私次第なのだと感じた。ときどき振り返って、そのとき感じたことを思い出し、日々の生活に活かしていきたい。そして、これから世界視野で物事を考え、社会での自分の役割を果たせる人になりたい。

JASC でいろんな価値観に触れたこと、本音でぶつかったこと、密の濃い1ヶ月はじわじわと私の人生に影響を及ぼしている。かけがえない仲間ができて本当によかった。

### 井上雅章

現在私は、800名ほどの留学生を擁する国際寮に日本人学生アシスタントとして住んでいる。そこでは実は、日米学生会議の経験を他人に話す事は警戒を要する。何故かと言うと、全員が全員ではないものの、住人の一部は「アメリカは国際社会において横暴で勝手、国内でも有効な社会保険政策もなく社会は崩壊間近」というイメージを持っており、平たく言えばアメリカの評判が必ずしもよくないからである。アメリカと日本の相互理解を目指すプログラムの実行委員までした、などと言えば、自分がアメリカの意見の代弁者だという風に思われてコミュニケーションに支障を来す可能性もある。

だが、彼らとアメリカについて話すとき、自信を持って言えることがある。「アメリカ人は話せる連中だ」と。二度の日米学生会議を経験した私には言える。

### 井上裕太

「世界市民的見地における普遍史の理念」についての一考察

これは、僕と二人のアメリカ人との、あるひと夏についての物語だ。正直に言えば、僕と個性溢れる71人についての壮大なクロニクルを書きたいのだけれど、僕たちがいつか地球から飛び出すという決断をするまでスペースというものは常に限られている。いや、そんなときが来たってちっとも変わらないのかもしれない。でも、そういう制限が生み出す緊張はときに人を輝かせる。この物語にも、ピントを絞り込むことで幽かでも光を宿すことができると思う。

まずは、“あるひと夏”のちょうど1年前から話を始めなければならない。僕らの物語は、いきなり衝突からはじまる。1年後、どんな夏を過ごすか。そんな簡単なことなのに、考え方も、生きる社会もまったく異なる僕たちは、合意に至れる気配すらなかった。誰かと何かをともに形作るという作業は、いつだって困難だ。カントだって言っている。人間は社会を形作る生き物である。でも、それは信頼から生まれるものではなく、お互いに大嫌いであるで信用なんて出来ないからだ。だから、危なっかしくて放っておく事なんて出来ないのだ、と。

僕らはぶつかり合い、とことんまで話し合った。怒って席を立ってしまう日本人もいたし、涙を浮かべながら自らの想いを吐露するアメリカ人もいた。そんな色とりどりの絵の具が無造作に盛られたパレットを使って、青写真を描く作業を引き受けたのが、僕とスタントンだった。やっと1人目の登場人物を紹介することが出来る。彼は、ヒップホップとセクシーな女の子をこよなく愛する、愛嬌のある大男だ。会議場を出てアトリエに入ったとき、彼は言った。

「お前は必ず手を挙げると思ったよ。だから俺もやることにした」

お前の思い通りにはさせない。そう顔に書いてあった。牽制し合い、じっくりと皆の想

いを咀嚼しながら、僕たちは絵を描いていった。そして、“あるひと夏”の設計図が出来上がった。アトリエを出るときに、スタントンがにやりとしてつぶやいた言葉。

「裕太。お前、出来る男だな」

それから一年間、それぞれの国へと帰った僕たちは設計図の実現を目指して文字通り走り回った。今から考えると、よくまあ辿り着けたものだと思う。長く曲がりくねった道の果てに、“あるひと夏”がはじまる。太平洋を渡り、1年ぶりに再会したのがもう一人の主演、シーハンだ。ハーバードに通う、透き通った眼をした敬虔なクリスチャン。“あるひと夏”は、僕たちふたりのものと言っても過言ではない。こんなことを言うと山のような反論が押し寄せるかも知れないけど、僕がそう言うのは自由だ。表現の自由よ、永遠なれ。

“相棒”と僕は、1ヵ月間いつも一緒にいて、本当にいろいろな話をした。彼は寡黙な男だから、大抵は僕がしゃべってそれにシーハンが反応するというスタイルだった。日本の社会について僕が何を考えているのかを話せば、相棒はアメリカについて引き合いに出しながら自分の考えを述べる。時には僕は人生観を語り、それとキリスト教の教えを比較してシーハンが応える。そんな風にして、僕たちは1ヶ月間を過ごした。“あるひと夏”が終わりに近づいたとき、シーハンがゆっくりと噛み締めるように言ってくれた言葉を、僕は忘れない。

「僕は、小さな頃からキリスト教の教えを受けて育った。唯一の正しい道は、イエス・キリストだってね。でも、裕太と話してそれは違うってわかった。世界にはいろんな考え方があっていいし、正しい道はひとつじゃない。」

そろそろ、終わりにしなければならない。最後に、本当のことを言おう。すべてを文章

にするにはあの夏は眩しすぎる。誰だって太陽を見据えるには、目を細めなくちゃならないだろう？ここに書くことが出来たのはあの濃い夏の、ほんの一部分だけだけれど、その溢れんばかりのエネルギーや、眩いばかりの輝きをうまく切り取っていたらと願う。

そういえば、あのドイツ人はこうも言っている。仕方なく社会を形作る人間は、否が応にもいずれ世界中で同じ枠組みを共有することになる、ってね。そうなれば、この星に生きるすべての人びとは分かり合える。なぜか？僕らがそれを証明して見せたからさ。



## 大原学

日米学生会議を終えて

～もどかしさと、悔しさと～

手を挙げるのが遅かった。日米学生会議は終わってしまった。

全日程の最終日、みなに向かって発言できる最後の機会をオレは逃した。言いたいことはたくさんあったはずだし、言いたいことも決まっていた。なのに、英語でどういふかを考えたりして手を挙げるのを渋っていたら、残り時間はあとわずかになっていた。勇気を出して手を挙げたが、ジェフからxのサインが出た。遅かった。

最後の RT プレゼンテーションのときは、自分のチームにある質問が来た。「その質問に

答えるために自分はここに来たんだ。」というような質問だったが、自分が口を開こうとした瞬間、自分の前にいるメンバーがそれに答えてしまった。オレは落胆した。結局、言葉でうまく表現できないまま、言いたいことも言えないまま終わってしまった。

思えば、こんなことの連続だった。発言しようと思うときになって、時間切れということが何回もあった。みなと共有したかったことをできなかったという悔しさが残る。何をためらうのか、自分でもよくわからないがためらうことが多かった。

この悔しさをオレは大事にしたい。毎日が挑戦という環境の中、他のみんなががんばっているのを尻目に、ここぞというときにうまく自分の意見を表明できなかった自分がいたことを絶対に忘れたくない。JASC は予想した以上に、ものすごく楽しかった。楽しかったからこそ、思い出は美化されるからこそ、あのときに抱いた悔しさを忘れてはいけな

い。人生で一回きりの JASC という経験。そこで出会った素晴らしい仲間、最高の思い出、そして「ためらった」というあの悔しさ、それら全てが宝物。「終わってからが JASC だ」という言葉の意味が、今なら理解できる。

See you guys, again.

### 小笠原瞳

72 人で共同生活をした JASC の 1 ヶ月間、私が向き合い続けたのは、結局他でもない自分自身だった。旅も国際交流も大好き、楽しくないはずはない、と参加した JASC だったが、現実には高いレベルのレクチャーやディスカッションについていけない自分や集団行動が苦手な自分がいて、2 週間目の DC サイトの頃にはストレスが極限に達していた。いくら「人とコミュニケーションするのが好き」とか「世界を平和にしたい」などといっている、余裕のあるときならみんなと仲良くできて当たり前だ。でもそうでないとき、余裕のないとき、自分がつらいときに人に対してどう振舞

えるか？思いやりを忘れずにいられるだろうか？分科会でやっている「移民」の問題と一緒に、対立というのはエゴとエゴがぶつかる本当に余裕のないところで起きるものだ。自分が日頃考える理想がどんなにきれいごとで表面的なものだったか、実際自分が精神的につらい状況になって初めて気付いたのである。JASC は「国際交流」なんていう浅い付き合いではないのだから。

落ち込んでいた間、それでも親切に話を聞いてくれた JASCer たちの存在が本当に心の支えになった。それ以外のときも、様々な場所を訪れる中で持つ違和感、問題意識...それらはいつも曖昧だったり感覚的だったりしていたのだが、毎回何か感じる度に、いろんな友人に話を聞いてもらい、意見を交換することができた。

会議も終わりに近づく頃、私の中では自分のことで精いっぱい人のために働いたり、会議に貢献したりできなかった、と後ろめたさが募っていた。でもそんな私を救ってくれたのも、また友人の言葉だった。「めんどくさいフォームに応募書類書いて、めんどくさい春合宿に来て、めんどくさい事前合宿も参加して今めんどくさい会議にきてるんだから、何も貢献してないことなんてない」と言ってくれた EC、自分もかつて別の会議に参加したが何もできず恥をかいたが今回の会議でその体験を元に同じ課題に取り組み成功を収めたと体験を話してくれた EC、「大事なのは、人がどう見るかじゃない、自分の弱さを自覚して自信を持つことだ」と教えてくれた友達...本当に救われて、涙が出るくらい感動した。

その頃にはあんなにストレスだった「集団」がいつの間にか心地よいものになっていることに気付いた。毎日がとても貴重で理想に溢れた場所にいたんだな、と JASC が終わった今さらにみんなとこの場にいられたことへの感謝の思いが強くなる。帰国してから JASC での楽しそうな写真を眺め、みんなからの JASC Mail を読んで、「確かに私は JASC に参加したんだなあ、確かに楽しかったんだなあ」と改めて感じてなんだか不思議な気持ちにな

ったのを思い出す。

JASC 中に何かを残すとかが、やり遂げられたわけではないけど、あの1ヶ月で見たもの、考えたこと、出会った人、そして事前活動で勉強した様々なことはずっと私の中に残っていく。そしてこれからの新しい勉強や経験や出会いとある日有機的に結びつくこともあるだろう。だから今形にならないものも、ありのままにあたため続けよう。そして「社会を、世界をもっとよくしたい」という純粋な JASC の問題意識を忘れたくない。私は来年就職するので EC にもなれないけれど、JASC の社会発信という目的は、一生をかけてやっていくべき課題であり、自分なりに自分のスタイルで取り組みたい。

今、私の先にも JASC という長い道は続いている。



### 尾田亜沙美

～ JASC からの贈り物・JASC への贈り物～

デスクにはきらきらの笑顔が詰まったアルバム。春から共に過ごした分厚い JASC ノート。スタバの Washington タンブラー。New York T シャツ。Oklahoma ベア。San Francisco 時間のまま時を刻む腕時計。温かい JASC Mail。そしていつの間にかひと夏の夢に思いを馳せている。

不安と緊張をスーツケースに押し込み、京都を旅立つ。久しぶりに再会した 35 人の笑顔。私たちを待っていたのは快晴の夏空。ついにその幕を開けた本会議、まだ実感はわからない。初めての United Airlines、やがて緊張の離陸。高度 3 万 3 千フィートで食べられるとは思ってもみなかったカップラーメン。JFK 空港で迎えてくれた AEC。車窓から流れ去る景色、ここはもう America なんだ!!

真夜中の Cornell 大学、出迎えの Amedele を見て長旅の疲れも飛んでいった。...でも私の Buddy はどこ?? ベッドですやすやす。今だから笑える Risa との出会い。始まった JASC 本会議。夢のような Cornell のキャンパス。水のしぶきが気持ちいい、キャンパスの滝。焼きとりパーティーにドッチボール、スキット。時間がここだけ切り取られたかのようにゆっくりと濃厚に流れていく。

徹夜で待った早朝のバスは American time で到着。New York の街角。劇場から出て来た有名人(?)に黄色い歓声があがる。暑さで全く食べられない。渡米前の熱がぶり返して、New York の夜はホステルでひとりぼっち。ベッドにそっと食べ物を置いていってくれた友達。すっかり元気になった翌朝。「ヒーロー」たちの眠る Ground Zero はあまりにも無機質だった。あの時目の前にあったがれきの山はどこにいったのだろう。そしてあの時誘われた涙は...。5 年を経た「あの場所」は何の感情も抱かせてはくれなかった。ただ事実として受け止めようと、呆然と立ち尽くすより他になす術がなかった。太陽をいっぱい反射してそびえ立つ国連本部と翻る万国旗、捻じ曲がった銃。世界平和への取り組みがここで営まれている。国連大使のレクチャー、国連の限界や課題、日本の立場に思考を巡らせる。New York の喧騒を離れ、バスはやがて America を具現化した街へ。

合衆国の首都、数々の歴史の舞台、Washington D.C.。首都の名にふさわしい様相を呈している。Smithsonian 博物館で学んだ America という国。軍事・宇宙は America の力強さを感じさせる。America の、そして世界の歴史を彩る大統領。暗殺の歴史もまた歴史。5 年前 Pentagon に掲げられていた星条旗、ぼろぼろになって博物館にその姿を現す。'FREEDOM IS

NOT FREE.' 戦争の惨禍は静かに語り継がれる。石に彫られた名前は一人ひとり生身の人間だ。その一人の人間と、それを取り巻く人々の巨大な悲しみは、想像だにできない。かつての日本人はこの国の人々と戦ったのだ。それをたやすく理解することはできなくとも、歴史はそう語っている。戦争の悲しさ、愚かしさ、言葉にならない感情は、世代を経て、なお受け継がれる。日米学生会議にとって、これらの戦争はその原点ともなっているのだ。Vietnam Veteran 記念碑、紙と鉛筆で名前を写し取る遺族の姿に悲しさを覚えた。私はこの場を訪れ、何を考え何を感じたのか、自分に問いたい。ホステルで気が遠くなるほど大量に作ったお好み焼き。お好み焼きは平和の味がする、本当にその通りだね。日本大使館でのレセプション、たくさんのOBにお会いし改めてJASCの伝統を感じた。ヒーローを生み出すWhite House、華麗な宮殿さながらだった。熱くビジネスを語ってくださったAlumni Nightのゲスト。Life Goalについて語り合ったAlumni、理想の恋人について語り合ったSpecial Topic、JASCの伝統を感じるFounders Day。幾許もの歴史を見守ってきたCapitolとそれを見つめるLincolnの一途な眼差し。Reflecting Poolに映える夕日とWashington Monument、Rooseveltの名言が過去から甦る。Potomac Riverを眺めるJefferson。独立宣言書は静かにそこに佇む。日没の主都は赤く染まり、瞬く間に夜の帳が空を覆う。紛争解決の可能性を探るフォーラム、悲惨な迫害を目の当たりにし、そしてアクションを起こす人々の熱意を感じた。金融機関の可能性について考えるきっかけを与えてくれたWorld Bank訪問。帰国してからやってみたい事が見えた。小さな行動の積み重ねの大切さを学んだNGO訪問。そしてWashington最後の夜は久しぶりの中華料理に舌鼓。

Chicagoを經由して早朝の飛行機は轟音をあげる。乾燥しきった赤茶色の大地、Oklahoma。灼熱の太陽と彼方に広がる地平線。石油掘削機が、のんびりと動いている。のどかな街、これもまたAmericaなのだ。野生のBuffaloにPrairie-dog。Native Americanのフォーラム。迫力の太鼓。Native American Expo、彼らの円陣で彼らのリズムで共に踊った。テロの跡地、一瞬で理由もなく

人生が終わった人々。悲惨な歴史は繰り返されるのか。よく分からなかったけれどジョークが飛び交う州議会訪問。カウボーイ博物館、ガイドはカウボーイだったのか...? 夜中のOklahoma大学をランニング、広すぎて息が切れる。突然言い出したHulaダンスと「涙そうそう」、たくさん参加してくれて本当に嬉しかった。みんなのパワーが爆発したTalent Show。アカペラに感動。初めて踊ったよさこい。そして楽しかったhomestay。湖のほとりで真半分の虹と日没を眺めながらのディナー。とても暖かい雰囲気ですてくれたパパとママ、SOONERの心意気を教わった。今までの教会のイメージがすっかり変わった、1<sup>st</sup> Baptist Church訪問。そしてOklahomaの夜は澄んだ虫の音色に包まれる。

Rocky山脈の広大な自然を眼下に飛行機は霧の町San Franciscoへ迷い込む。寒くて凍えそう。日本領事館でのレセプション。緊張の企業訪問。飲めない大ジョッキの黒いビールを片手にジャズを聴きながらAIDSのSpecial Topic。赤いJASC Tシャツ、Union Squareでのよさこい、心に残った。Angel Islandから一望したSan Franciscoの坂道、息もつかない絶景。Alcatrazの「ザ・ロック」が眼前に浮かぶ。Fisherman's Wharfでの豪華なディナー、凍えた体が温まる。一日中ホステルにこもってのフォーラム準備。翌日のフォーラムは厳かな雰囲気の中行われた。1ヶ月の私たちの結果、それがついに形となって現れた。会議は終わるんだ、そんな気持ちを抱きつつ。あれだけ気にしていた日焼けも体重も、San Franciscoに来てからすっかり忘れてしまった。毎日食べたマスカット。足繁く通ったベーカリーにクレープ屋さん、スタバにおしゃれなバー。浜辺に座り、霧に佇むGolden Gate Bridgeを眺めながらのBBQ。個性が光るEC Election、熱い気持ち伝わってくる。2時間かけて往復したGolden Gate Bridge。日本庭園のあるGolden Gate Parkをさまよう。バスでSan Franciscoの街を颯爽と走りぬける。高層ビルから見渡したSan Franciscoの町並み。分からなくても気遣ってくれたRTのメンバー。Benちゃんの”Global Business!!”って声が今でも耳に響く。話についていけない焦り、準備してきたことを生かせない腹立たしさ、それでもみんなが助けてく



れた。Group Reflection、その場にいるだけで温かくて心地良かった。皆が皆のことを考えている、理解しようとしている。JASC Family。そして Closing Ceremony、Yokoさんの歌声、JASCソングが今でも耳に残っている。永遠にここにいたい。永遠にJASCerといたい。そんな願いも空しく、コンチェルトはやがて別れの章をつむぎだす。また会う日まで。

JASCが終わって何か大きな事を成し遂げたような、それでいてぽっかりと穴が開いたかのような寂しさが胸の中を交錯しています。長くなりましたが、最後にもう少し書いてJASCの感想にしようと思います。

私のJASCは一通のメールで始まりました。「私は障害があります。それでも参加する資格はありますか。」そのように聞かずにはいられなかったのです。社会は障がいをもつ私を認めてくれない、という気持ちがありました。今こうしてすばらしい58th JASCのメンバーである事を誇りに思います。JASCerは私を受け入れてくれた、それも想像以上に。

当初から私のJASCでの目標は「日本のことを知る、自分のことを知る」というものでした。約10年前、アメリカの火星探査機マーズパスファインダーは地球を飛び立ちました。火星を知ることは、地球を知ることもある、と。地球の生い立ちを学ぶために人類は火星へと向かったのです。そして私も、アメリカという外の世界へ行くことで内面を見つめようと思ったのです。その目標はある程度達成されたと思います。私は日本人としての私、アイデンティティを自覚した自分を理解するように努めました。自分はどういう人間で、どういうことができ、どういうことができないのか、それを常に考えていました。

JASCは私にとって試練でした。日本語でさえよく聞けないのに、英語で、しかも新しい環境での生活は慣れるのに時間がかかります。話したい、聞きたい、そういう気持ちだけが空回りしてしまったこともありました。それでもJASCerの中になると温かい空気を感じずにはいられませんでした。隠していたい、そういう本心とは反対に、私は皆にアピールしたつもりです。お互いを理解するためには私のことも言わなければいけないと思っ

たから、JASCerは私を本当に全ての面においてサポートしてくれました。そして私の話に耳を傾けてくれた。聞こえない私を励まし、ポジティブなアドバイスをくれ、そして涙を見せてくれた友達。こんな経験は全く初めてだったし、その時私はJASCに来て本当に良かったと心から思いました。これが私がJASCで得るだろう最も大きなことなのだと漠然と感じていました。大学に入ってから障がいを持った私は、ずっとずっと、大切な自分を認めてあげる事ができませんでした。聞こえていたら出来たかもしれないという悔やしさを、怖くて逃げている自分、聞こえないことで自信をなくし本来の私でいられない苦しさ、一人で耐える辛さ、でも、JASCで、それも全部含めて自分なんだ、と思えたのです。障害がなければ、もっと何でも出来たかもしれません。けれど障害がなければ、こんなに素敵な自分にはなっていなかったかもしれない、そう思ったのです。

私には聴覚障害がありますが、それは決して悲しいことではない、と今なら思えます。誰にでも克服すべき事はあります。私にはそれが障害であっただけ。それが私の可能性を否定するものだとは思えないし、きっと私にはそれ以上にすばらしいところがあるのだから、それをもっと生かしていこうと思うようになったのです。障がいは与えられたものです。けれど、自己実現は決して与えられるものではない。それは私自身が追い求めるものなのです。JASCはそれを教えてくれた。日米の平和や世界の平和について考えたこと、追い求めた崇高な理念は私の糧になりました。しかしそれ以上に私は私自身のあるべき姿を見出し、それに対して自信を与えてもらったような気がするのです。私の勝手な解釈で良ければ、JASCはそのような場、自分自身を見出し成長させる場だと思っています。

そしてもう一つ、JASCの選考の時から考えていたことがあります。それは、私が一体どのような形でJASCに貢献できるのか、ということ。そしてついに私はその答えを見つけられませんでした。とてもネガティブな言い方もかもしれませんが、実際私がJASCに貢献できたことがないような気がするのです。私はいつも聞こえなくて困っている立場だから、いつも助けられている。今回もそうでし

た。これは今後の私の課題ですが、自分は何にどのような貢献ができる人間なのか考えていきたい。そして、私がこれから JASC に貢献できるとすれば、それはさらに成長することなのでしょう。JASC で得たもの、今までの人生で培ったもの、それらを土台にして、さらに新しい人生を歩いていくこと、これこそが JASC への貢献だと思います。私は JASC から多くを与えてもらった、今度はそれを JASC に与える番だと思います。

スピーチの苦手な私が、最後のセレモニーでどうしてもみんなに言いたかったこと、'All I have to say is thank you, thank you, thank you.....(endless)' これは心から皆に捧げた言葉です。この場を借りて、支えてくれた 58th JASCer 全員にお礼を言いたい。ありがとう。Thank you. 一番迷惑をかけた RT のメンバー、みんなのおかげで楽しめたよ。そして、私たちの会議を一年間かけて準備してくれた実行委員のみんな、その努力に感謝と敬意を。私たちの会議を支えてくださった多くの方々に、心からの感謝の気持ちを。行く先々で出会い、楽しい時間を共に過ごした全ての方に、出会えたことに感謝の気持ちを。運命の出会いを果たした 72 人の絆がこれからますます固いものとなりますように。そして最後に、これからも日米学生会議の精神が脈々と受け継がれ、悠久の時を越えて日米の、そして世界の平和に貢献できるものとなりますように。Long Live JASC!! I Love You, JASC!! Thank you.



## 笠井寛子

次のひとにわたす

この夏、私が日米学生会議で得たもの。

- ・ 「私、ぴろの悪い部分もわかった上で、ぴろのことすごい信頼してる」「ぴろがいない 58th JASC は考えられないよ」「これからもずっと付きあっていきたいから」と言ってくれた友達
- ・ 企業の社会的貢献についての理解
- ・ 国際政治に関する知識と問題意識
- ・ 無意識に自分が誤ったアメリカのイメージをもっていたことへの気づき：アメリカってそんなに日本と変わらないし、どの国にもいろんな人がいる
- ・ 尊敬されるリーダーとは：人の話を最後まで目を見て聴ける・失敗したときの対応ができる・言い訳や文句を言わない・今自分にできることを考えられる・人を思い込みや偏見で判断しない・視野が広い・人間味が感じられる・時に何かを犠牲にできる・上手に仕事を割り振れる・上手に人にお願いができる
- ・ 自分の強みや弱み、価値観を知ったこと
- ・ 組織の中での自分の役割：きっと組織って、A が得意で B が苦手な人と、B が得意で A が苦手な人の集合体なのだと思う。だから私に欠点があっても、それを自覚している限り誰かが助けてくれる。チームワークってすばらしい。
- ・ 寝ないと集中力が下がること
- ・ けじめをつけることの大切さ
- ・ どんなにやりたいことが溢れていても、自分のキャパはオーバーさせない
- ・ 行動力：「この人に会って直接お話が聞いてみたい！」なら、電話しろ！
- ・ ディスカッションのすすめ方：”Are you trying to say that...?” “Then, what do you think?” “I personally believe that...”
- ・ 自分の気持ちを正直に言うことの大切さ：そのためには信頼関係が必要

私はこの夏、様々な方の親切に支えられ貴重な機会をいただき、これから取り組むべき多くの課題とパワーを得させていただきました。

私は今から「次の人に渡す」ことに取り組みたいと思います。自分が与えていただいた機会や学びを、次の人に渡す。そうやって私が例えば五人の人に渡して、その五人がまた新たな五人に渡して、どんどん波が広がっていけば、日米学生会議は世界を少しずつ変えていく存在になりうるかもしれません。いま、次の人に渡そう。

### 唐澤由佳

1年前の夏、1934年世界情勢の悪化を危惧し、相互理解の大切さを体現した学生達によって発足した日米学生会議のバトンを60年という年月を経てこの手に握り、1ヶ月やり遂げた充実感、今後の責任の重さ、来年仲間に再会できる喜びが私の中に渦巻いていたのを覚えている。

**「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」**

実行委員の活動を通して、いつの日からか暗唱できるようになったこの言葉は、第58回日米学生会議の「二国間を超えた未来～伝統への回帰と私たちの挑戦～」というテーマの下、「わたしたち学生は社会にどう貢献できるのか」という壮大な問いかけとなり、私たちを（少なくとも私を）動かし続けた。

実行委員としての1年間は、戦後60年が経ち、日本社会も日米関係も周辺諸国との関係も変化する今、私たちは「学生」として、また「第58回日米学生会議」として、世界の平和のために何ができるのだろうか、そして何をしなければならぬのかという問いに答えるために日々奮闘した1年であった。そうしてもがいて出した自分達なりの答えが、ソーシャルイノベーターズ、よさこい、焼き鳥・お好み焼プロジェクト、Trilateral Forum、Conflict Resolution Forum、ビジネスフォーラ

ム、分科会FW、Native American forumなどの個々のプログラムであり、ひいては第58回日米学生会議である。

日米のみならず、タイ、中国、韓国、オーストラリア、米国、ベトナム、台湾、フィリピン、イギリスなど様々なバックグラウンドを持つ学生が集い寝食をともにする第58回日米学生会議という比類なき空間、そこに存在する独特の空気・moments。過ぎ去って行く一瞬一瞬をつなぎとめたくて、日記を書こうと試みたが、前半のサイトのコーネルやワシントンDCでは、1年間の成果が試されているような緊張感と日々日米のデリゲートの間で育つ good chemistry を目にする充実感とともに、疲労が押し寄せて気絶するように眠りについた。そして、オクラハマやサンフランシスコでは、日記を書く時間を惜しむほど、一人であるよりは皆とともに会議で起こっている「奇跡」の目撃者になりたかった。ここで「奇跡」と呼ぶのは、恐らく何万分の一という確率で出会った参加者たちの中で生まれていく友情や数々のストーリーである。

会議が無事幕を閉じたいま、72名の叢智が集いこの人たちと一緒に何でもできるのではないかと、勇気と希望を与えてくれた一人ひとりの仲間を始め、日米学生会議の活動で出会った全ての方に感謝したい。また、実行委員の活動期間中に、就職活動という人生の大きな決断のときを迎えたこともあり、多くのアルムナイの皆さんに会い、それぞれの人生においての日米学生会議について様々のお話を伺うことができたことは私の大きな財産である。

あのアツイ夏が終わり、日米学生会議で得たものは余りにも大きすぎて、365日JASCingの日々からどうもとに戻ればいいのかと途方に暮れたときがある。また、「JASCの終わりは、始まりである」ことを痛感し、半年後に一社会人となるわたしは、どうやって今の想いを持ち続け歩いていけばいいのか、ふと心細くなる時がある。

最後に、そんな折、私の心の中に浮かび、奮い立たせてくれる言葉を紹介したい。

*"We ourselves feel that what we are doing is just a drop in the ocean. But the ocean would be less because of that missing drop." -- Mother Teresa*

素晴らしい 16 名のチームメートと目標に向かって走り続けた 1 年を終えたいま、「私」として再び歩み始めるが今の気持ちを忘れずに今後も「大河の一滴」のためにもがき続けてゆきたい。



### 川口耕一郎

「アメリカ人の愛国心にもう一度触れたい。」

それが私の日米学生会議への応募動機だった。アメリカの首都ワシントン D.C. で高校 3 年間で過ごした私は、自国に誇りを持ち、自国の価値観を「正義」と捉えるアメリカ人特有の意識を常に感じてきた。アメリカが関与した戦争の正当性を常に強調するような記述が目立った高校でのアメリカ史の授業、同時多発テロ後の愛国心の高揚、イラク戦争について同級生との議論、どれもがアメリカ人の世界観を理解する上で有意義だった。中でも広島原爆投下に関する教科書の記述には強烈な印象を植え付けられた。そこには原爆投下により、戦争終結が早まり、世界中の何千万の人々を救ったと書かれている一方で、原爆による被害者は“thousands”とされるにとどまっていた。確かに、英語には万という単位は存在せず、20 万人以上の被害者数

を“thousands”と記述することも可能である。しかし、これでは原爆による被害は正確に伝わらず、原爆投下は正当な目的の下で行われたとの印象を与えてしまうのではないかと危惧した

これ以外にも、ベトナム戦争を例外とし、独立戦争から湾岸戦争までアメリカが関与してきたすべての戦争において、アメリカの正当性が強調されていた。圧制的な勢力に対抗すべくアメリカが立ちあがってきたという記述は、「テロとの戦い」を掲げ、国際問題の解決手段として武力行使を正当化させる現在のブッシュ政権と通じるものがあると思う。

しかし、高校の時は十分な知識もなく、日本人としてこの問題をどう捉えるかという意識に欠けていたため、帰国後もずっと心に問題意識を抱えたまま、答えを求め続けていた。そこで、1 ヶ月アメリカに滞在し、彼らの世界観、特にアメリカ人の聖戦意識を支える愛国心にもう一度触れ、日本人としての立場からの意見交換を通じて、今後の日米関係、世界のあり方について考えてみようと思い、参加するに至った。

日米学生会議の特徴は、なによりも日米両国の学生が文化や背景の違いを認め合った上で、自らの価値観をぶつけ合って議論することができることである。それを通して、相互理解が可能となる。

第 58 回会議では、ニューヨークでグラウンド・ゼロ、ワシントン D.C. で第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争のメモリアル、そしてオクラホマでは連邦庁舎爆破事件跡地を訪れる機会があり、そこでのアメリカ人学生との議論を通じて、改めて彼らの愛国心に触れることができた。特に、グラウンド・ゼロで感じたことを終夜、皆で話し合ったことが一番の思い出である。同時多発テロにより、ブッシュ政権が推し進めていた「テロとの戦い」が正当化され、その過程でグラウンド・ゼロが愛国心を鼓舞するために政府によって恣意的に利用されたかどうか議論のテーマだった。そこで感じたのは、彼らはたとえブッシュ政権の政策には批判的であっても、国とし

でのアメリカには強い愛着があり、それが「人種のサラダボウル」と呼ばれる多民族国家アメリカを統合する一つの大きな原動力になっていることであった。興味深かったのは、彼らの本音を知るために、意図的に批判の矛先を、政府から「アメリカ」「アメリカ人」に変えたとたんに、彼らの顔色が急変し、一瞬にして私が四面楚歌の状態で議論をする羽目になったことだった。アメリカ人の学生の反応は当然予想していたことだったが、その急変ぶりには正直驚かされた。

しかし、日米学生会議は単なる意見交換、相互理解の場ではない。1ヶ月の間寝食を共にし、時には恋愛について話したり、我を忘れてはめを外して遊んだり、また時には困難に直面し、それを共に乗り越えることで、お互い強い絆が生まれる。そして、彼らと自分の相対化により今まで気がつかなかった自らの隠れた一面を見出すことができ、達成感を得られると同時に自己の再発見、啓発の場であると言える。

最後に第58回日米学生会議参加者、特に日本・アメリカ側実行委員16人に感謝の意を表したい。この1ヶ月は私の人生の中で最高のものだった。そのような機会を提供してくれた、実行委員には本当に感謝している。5月の春合宿以来、日本側実行委員の会議に対する情熱とその真摯な姿勢から多くを学び、日本側・アメリカ側両実行委員長の強力なリーダーシップとカリスマ性には幾度も感銘を受けた。そういった思いを礎に、本会議の企画、運営の仕事に携わるべく、この度第59回実行委員長に就任することになった。過去58回の参加者が築いてきた伝統を継承し、更なる信頼関係を実行委員の間で作りあげながら、第59回を史上最高の会議にしていきたいと考えている。

### 菅家万里江

夕暮れ、夏の気倦さの中に秋の涼しさを感じる時、私はいつも、ノスタルジックな切なさと共に58th JASCのことを思い出す。Alumni

である母親の影響を受けて参加した58th JASCは、母親の話と私の想像を遥かに超越した素晴らしい会議だった。一生忘れられない夏になったと、心から思う。

確かに、全てが「楽しかった」わけではない。言語の壁にぶつかり、自分の知識と経験のなさ、自分の小ささを痛感し、自己嫌悪と孤独に悩んだ日々もあった。全く違う価値観に出会って戸惑ったこともあった。アメリカの文化や社会に対し、違和感を覚えたこともあった。でも、自分の感じたことを、周りにいる参加者と共有することで、その感情は少しずつ消化されて、新たな感情を生み出した。まるで濾過のように、私の中に湧き上がった感情が、参加者達の多彩な価値観を経て、一滴、一滴、透明な雫となって私の中に滴り落ち、泉を作っていく感覚を覚えた。深い充足感と啓蒙される幸福感につつまれたあの感覚は、本当に忘れられない。JASCに参加していなかったら、こんなにも自分と社会と世界について考えることはなかつただろうし、考えられもしなかつたと思う。改めて、JASCの全てに感謝したい。

JASCは私に大きな試練と喜びを与え、私に揺さぶりをかけ、突き動かす、海のような包容力で私を受け止めてくれた。こんなにも自分が変わったと思える夏は今までにない。



## 国松永喜

胸一杯の希望を抱えて始めた大学生生活。  
何か煮え切らない自分。  
世間に溢れる矛盾。  
何もできない、いや何もせずに言い訳ばかり  
上手くなっていく自分。  
広い世界へのパスポート。  
閉じこもっていく自分。

私と JASC との出逢いは 2 年前に遡る。  
57th JASC 「共に創る明日」～戦後 60 年を振り  
返る～  
整理できない感情の群れ。  
泣けない自分。

58th JASC 「二国間を超えた未来」～伝統へ  
の回帰と私達の挑戦～  
虚勢と現実の自分とのギャップ。  
深く深く落ちていく・・・

でも、いつもあいつらがいた。  
“自分”という不自由からの自由。  
“世界”の相対的位置変化。  
「修身齊家治国平天下」

太平洋を超えて、二国間を超えて

いつもあいつらがいた。

涙がとまらない。

## 小迫由依

全身を使って歌う聖歌。体を左右に振り、  
手を叩き、何度も同じフレーズを歌う。私は  
無宗教だが、オクラホマのこの教会で宗教の  
パワーを肌を感じた。今回訪問した St. John  
Missionary Baptist Church は、三角の塔の教会  
のイメージとは全く違い、まるで学校のような  
だった。牧師さんの後ろにはゴスペル隊がひ  
かえる。Washington D.C.で行ったフォーマル

な教会と比べると、とてもノリのいい感じだ。  
一方、牧師さんはものすごく力強く聴衆に呼  
びかけ続ける。教会に集まる人たちも、みん  
な同じフレーズで答える。こんなに信仰深い  
人たちに会ったのは初めてだった。“Stand Up  
for Jesus”この日の朝の賛美歌である。このフ  
レーズを何度も繰り返していると、私は何だ  
か怖い気持ちになった。私が思い出したのは、  
N.Y.のグランド・ゼロにあった、建築材で組  
み立てられた大きな茶色の十字架だった。イ  
スラム教と対峙しているように感じられた。  
アメリカのヒーローとされた 9.11 の犠牲者。  
キリスト教が正義？キリストのために戦う  
の？正しい戦争なんてあるの？もし宗教が戦  
争の原因になってしまうのなら、どうして私  
の目の前にいる人たちは、こんなにも熱心に  
信じているの？私の頭の中で、らせん階段を  
駆け下りるように質問が次々と生まれた。

オクラホマのホームステイ先で、私はホス  
トマザーに尋ねた。彼女は、宗教戦争は宗教  
の悪用なのだと説明してくれた。なぜ教会に  
毎週通うのか、と聞くと、この習慣が彼女を  
支えているようだった。何かつらいことがあ  
った時に聖書を開くと、そこに必ず答えがあ  
るのだそう。アメリカ人のメンバーでクリ  
スチャンの人も、神は自分が一番必要な時に  
支えてくれる、と言っていた。Oklahoma City  
Bombing Memorial で生存者から体験談を聞いた  
時も、彼女は死を予感した時、神とのつな  
がりを感じた、と語っていた。フィールドト  
リップの際、ネイティブ・アメリカンのバス  
ガイドさんと話していて驚いたのは、ネイテ  
ィブ・アメリカンにクリスチャンが多いこと  
だった。私は、キリスト教は彼らにとって敵  
の宗教だと思っていたからだ。しかしそのキ  
リスト教は、ネイティブ・アメリカンが独自  
に伝統的な信仰と融合させて形を変えたもの  
なのだそう。こうやって宗教は、それぞれの  
形で、それぞれの人の一部になっている。  
こうやって多くの人を支えている。

私の所属する「科学技術と社会」の分科会  
では、バイオエシックスについて議論した。宗  
教の違いが、人間の根本である生命の始まり

の違いにつながる。事前活動でうかがったNHKのディレクターの方が、こんな話をしてくれた。「人間の心はどこにあると思うか?」という質問を30代40代の若い科学者に聞くと、例えば脳神経だとか自分の研究している専門分野を答える。一方ノーベル賞を受賞した70代の科学者は、「わからない」と答えながら、人間が横になっている絵の上に何かがあって、それと人間の身体が結びついている絵を見せたそうだ。この話を聞いて、どこか宗教的なものを感じた。

今回のJASCで、宗教について様々な視点から考え、経験することができた。行く先々で宗教が関連し、日本とは全く違う状況に驚いた。しかし、まだ宗教については良くわからない。それでも、宗教が多くの人にとって大切な役割を占めていることに、何か大きなことがある気がする。私の「今」を支えてくれるもの、それはどの宗教というわけではないけれど、今までの経験であり、出会った人たちであり、その人たちとのつながりであり、そしていつも応援してくれる家族である。このJASCが、私の「今」と「これから」を大きく支えてくれるだろう。



### 佐藤友紀

得た事が山よりたくさんあるこの1ヶ月間を文字にするのは、私には、なかなか至難の業の様に思える。文字にしてしまうと、思い出が整理され夏が完結してしまっ

しくなるのが分かっているので、ちょっと切ない気持ちになる事もある。実際、この夏が完結するなんて事は一生かけてもないのだろうけれど、気持ちを整理するのが苦手なのは、JASC後も以前と変化は無いようだ。

71人と一緒に過ごした1ヶ月弱は、集団生活と言うよりも、家族で生活をしているようでとても心地良かった。大学、地域、地元に住る家族、友達と沢山のコミュニティーに属している私だが、「居心地のいい場所」はそう簡単に見つけれられるものではない。その中でもJASCerと一緒に時間を過ごした時間は、沢山の刺激と、沢山の安心、そして沢山の愛情を与えてくれた。時間が過ぎ、話を深めていくにつれて無意識的に、相手を理解し、受け入れ、認める作業が私の中で行われていたようである。完全に理解し合うよりも、理解する姿勢をお互いに用意しながら、仲良くなっていくことは、とても心地のいいものであった。

在り来りだが、一番印象に残っているワンシーンについて書いてみようと思う。オクラホマというアメリカ人でもなかなか訪れる機会が無い、大変興味深い土地に足を踏み入れることが出来た私たちは、内陸特有のネイティブアメリカンの歴史を、目で、耳で、肌で感じ、沢山のネイティブアメリカンの人たちと直接お話をし、学ぶ機会を得た。歴史専攻の私が、この1ヶ月で最も、「うずうずしていた」瞬間かもしれない。この「うずうず」は、かなりポジティブな「うずうず」だった。歴史の継承が困難であること、政府との関係が広い視野で考えてもなかなか友好的でないこと、プライド、葛藤、現実。今でもあの時のAnquoeさんの、ちょっと切なそうだけど、現実を受け入れないといけないのかな、と思っている節を感じさせる表情が脳裏に焼きついている。その後、歴史や伝統の継承について、数人のJASCerと話をしていた時の事だ。歴史や伝統を重んじる姿勢に対して私はいつも積極的な意見を持っていたが、そうでない意見に出会った。先人たちも、伝統を時代に合わせて変化させながら、より生活しやすい

環境を創造して来たにも関わらず、ここにきてなぜ継承に拘っているのか。途絶えてしまうその文化・習慣も、途絶えるということが歴史の一部ではないのだろうか、という趣旨の意見だったように思う。少なくとも私の理解ではそうだった。衝撃というか、悲しかったというか、なんとも言われぬ気持ちを抱いた。歴史の継承が難しく、多くの「デントウ」が途絶えているのは、全世界で見られる現象である。もちろん、それも歴史の1ページであり、次に生まれてくる新しい「もの」がまた新たな歴史の側面を創造していくのだろう。しかし、私たちを生み出した先人への感謝と尊敬の意を込めて、先人が築き上げてきた土台を保ち、維持していくのは現代を生きる私たちにとって、とても大きな意味を持つのではないだろうか。こんな抽象的な言葉でしか気持ちを表現出来ないが、新しい1ページを創造していく事が出来るもの、先人のおかげなのだ。時間が流れ、様々な世界で次々とイノベーションが行われる現代でも自分ひとりでは何も出来ないし、過去があつての現在ではないだろうか。対極の意見に出会って、自分の意見を再確認することが出来たとて面白い機会であった。そんな経験が出来るのもJASCならではの、とても興味深く、心に残った瞬間であった。

アメデリには非常に申し訳ないが、関東にかなり集中しているジャパデリは夏以降も頻繁に交流し、非常に活発に戯れている。刺激し合え、支えてくれる存在が近くにいると言う事が、どれほど私にとって心強く支えてもらっているだろうか。関東以外に住んでいるはずのデリも、かなり自然に出現したりするので、距離の感覚が麻痺してしまいそうだ。得たものは山よりも多く、これからもっと増え続けて行くだろう。

2006年の夏の終わりを悲しむよりも、これからのJASCを考えて、積極的に、ずっと「うずうず」して行こうと思う。

## 真田雄太

4月に第58回日米学生会議の参加許可が届いた時に最初に思ったことは信じられないということ、そして次に喜びがこみ上げてきた。けれども一方で大きな不安もあった。それはうまく参加者の人たちとコミュニケーションができるかということであった。使用言語は英語であるということは英語圏内の国に留学などしたことのない私にとっては大きな壁であった。しかし結局私の不安は杞憂であった。私が自分の思っていた以上に英語を運用できたというわけではない。通訳してくれたジャパデリに私のつたない英語を理解しようと努力してくれたアメデリのおかげで、私は彼らとコミュニケーションがとれることできた。

日米学生会議の間にいろいろなことを「知り」、そして何より大切で大きな収穫であるたくさんの「すごいやつ」に出会うことができた。自分に足りないものを沢山見つけて、そしてきっと永遠の財産といえる友に何人も出会うことができた。一緒に1ヶ月を過ごしたみんなに感謝の気持ちでいっぱいだ。本当に楽しい時間だった。第58回日米学生会議の本会議は終わった。けれど、委員長が最後に言った「JASCerはずっとJASCerだ」という言葉がすごく胸に残っている。この会議で得たもの、自覚したものを今後の私の人生に生かそうと思う。





## 島村明子

自分はとてつもない愚か者なのである。

一年間の JASC を通じて学んだことはたくさんあるが、自分の未熟さをより理解することができたというのが一番重要で大きな発見であろう。

10 人を変えることができなければ、  
100 人を変えることができない。  
100 人、1000 人を変えることができなければ、  
社会は変わらない。

という格言を私は信じきっていた。1934 年、日米学生会議の創設者たちも、まずは自分たちのできる範囲で日米の学生の相互理解を深めることで、学生、そして社会を変えていこうという理念でアメリカに渡ったのであろう。誤解を恐れずに言えば、日米学生会議も人を成長させる一つの人材教育機関として、その企画・運営に関わることができることに喜びと使命感を感じていた。自分は何と傲慢だったことか。一つ重要なことを見逃していた。上記格言は一部真なのだが、補足ないし訂正が必要である：

自分を変えることができなければ、  
他人も社会も変えられない。  
自分を知ることができなければ、  
自分も変えられない。

そして、日米学生会議は自分をより良く理解し、変える大きなきっかけとなった。

日米学生会議が創設された 1934 年から 2006 年まで、世界平和は一度も訪れたことがない。軍事技術の進化などで戦争・紛争・テロなどで死ぬ人数は 20 世紀前半と比べると格段に増えている。

けれども、同時に私たちは着実に一步を踏み出している。61 年前まで殺し合いをしていた国の若者たちが、1 ヶ月を寝食を共にして

いる。寝食を共にするだけでなく、一緒に歌ったり、ドッジボールをしたり、飲んだりしている。米軍再編とイラク戦争について議論し、一緒にグラウンドゼロを見て、一緒に泣いたり笑ったりしている。議論に議論を重ねて、一緒に会議を企画運営している。1 ヶ月間自分と他者を見つめることで、成長していく。希望の灯火が次の代へと受け継がれ、日米学生会議を経験した人たちが、社会に羽ばたいて行く。

このような未来に向かう歴史の積み重ねを絶やさないことが、一番大事なのではないか。財務活動などを通じて、安定している日米間で会議を開催することの意義を疑問視する声も聞いたが、安定していると言われる時だからこそ、気を抜かないで日米間の結束ないし協力関係を促進する意義があるのだと思う。そして、そのためにはまず自国のこと、そして自分のことを知り、自分から変えて行くことが重要だと思う。

最後に、最も印象に残っているエピソードを紹介させて頂きたい。

2006 年 8 月 1 日の朝、私は、ほとんど不眠の状態で荷物片手に、仲間と一緒にコーネル大学の寮の前に立っていた。午前 5 時であった。道路の向こう側から、登場するはずのバスを待ちわびて、首を長くして待っていた。異変に気づいたのは、午前 6 時である。来るはずのバスが来ない。午前 8 時、太陽の光も強くなってきたので、とりあえず脱水者や病人が出ないように飲料水と食べ物を買出しに行く。午前 8 時、バス会社と連絡がとれるがバスの運転手は「あと 30 分後に着く」と曖昧にごまかし続ける。午前 9 時、とりあえずお昼を確保するために、ネットで NY 周辺のケータリングを検索する。結局バスが到着したのは予定よりも 5 時間遅い午前 10 時であった。

けれども、5 時間待たされても、ニューヨークシティでの企業訪問がダメになっても、参加者は不満や文句を全く言わない。逆に「楽

しく歌を歌い、よさこいを練習できたから気にしないで」「今まであんまり話すことができなかつた人と喋れた」と実行委員を励ましてさえくれる。実行委員をやっている良かったと思えた瞬間である。同時に、何事も楽しむことが大事であると参加者に教えてもらった瞬間でもある。

参加者の皆、最高の夏をありがとう。実行委員の皆、こんな私でも一緒に活動してくれてありがとう。そして、協賛者、主催者財団法人国際教育振興会の方、支援して下さったOBの方々、ありがとうございました。

自分は愚かである。だからこそ、学ぶことがたくさんあって楽しいし、謙虚に色々なことを吸収していきたいと思う。

### 杉山亮太

日米学生会議で過ごした1ヶ月は人生の中で最も充実した1ヶ月であったと思う。色々な人と出会い、色々な人と話し、色々な人と分かり合った。JASCが終わって1ヶ月が経ち、結局なんだったのかと聞かれると答えられない。ただ確実にいえるのは、いい面も悪い面もあったけど、それらすべてひっくるめてトータルで本当に本当に楽しかったということだけである。

初めてアメデリに会った時の事、一緒にドッジボールやサッカーをした事、BARにくり出して杯を交わした事、カラオケで踊り歌った事、レセプションから抜け出して散歩した事、誰が可愛いかで盛り上がった事、インディアンとダンスした事、夜の散歩でカップルと遭遇してしまった事、Homestay先でのハプニング、Angel Islandの頂上で見た景色、極寒のBeachでの異常な盛り上がり、closing ceremonyでの涙、出発を惜しんでした数え切れない hug、そして飛行機で読んだ沢山の手紙...

### Priceless

どの場面をとってもそれは自分にとってのJASCのかけがえのないOne piece。そしてそのピースはこの72人の最高のJASCerによってしか作ることが出来なかった世界にひとつだけのmaster piece。お互いのことをまったく知らなかった72人がこうして一ヶ月を通してかけがえのない友情を育むことが出来たという奇跡はJASC LOVEの本物の姿なのだと思う。

これからも日米学生会議が友情の輪を一生つなげていけますように。



### 須藤淳

私の過ごした21歳の夏は人生で最も刺激的で、濃密で、最も物事を考え、感じた季節であった。3ヶ月前までは全く未知の71人の人間が、2006年の夏を経て友になり、親友にもなり、自分を支えてくれる大切な存在にもなった。

日米学生会議とは自分にとってなんだったのか？この質問の意味はとても大きいもので、現在でもはっきりとした答えを見出せない自分がある。これからの大学生活や社会人生活を送る際に少しずつその答えが見えてくるのだと思う。ただ、一つ言える事は、JASCの存在がなかったら今の自分は存在し得ないし、そこで得た友人たちも当然のことながら存在

しない。

不思議なもので、72人で訪れたアメリカの各サイトは個人で訪れるのと較べて72倍の意味を持っていた。自分は常に日本の学生として意見を求められ、日本の学生として質問をする。JASCに存在する前に持っていたアメリカ像が少しずつ崩れ、少しずつ形成されていった。以前に持っていたアメリカ人像も半分ほど崩れ、新しい半分が加わった。

JASCの報告書を初めて読んだ8ヶ月前は「そろいもそろって照れるような文章を書きますねえ」と考えていた私だが、今現在は彼らが報告書を書いていたときと同じ心境であると確信している。同じ場所、同じ時間を共有し、異なる意見を交換、ぶつけあって新しい自分の考え方を作りあげる。同じ朝食(文字通り毎日同じ時も...)を食べ、同じ公園を散歩しながら、異なる価値観に巡り合い、新しい人間関係を築いていく。このプロセスを一ヶ月間続けることがJASCなのだと思ふ。

72人のJASCERには72人のJASCと未来がある

今後自分を含む72人は58回のJASCERとして生きていく

一人ひとりにとってJASCの意味は異なるけれど、共有した時間を再共有していく  
JASC FOREVER というのは本当のことなのだろうと感じる。

JASCに応募を考えている人が、この文章を読んでいるとしたら、私は間違いなくこの素晴らしい会議を作り上げることを勧める。

### 高井竜輔

いつの間にか夢を見なくなっていた。正確に言うなら夢を失っていた。腐臭と偽善に塗れた2年間の汚辱の日々に僕は将来に思いを馳せる力さえ無くしていたのかもしれない。

人はいつ死ぬのだろう。心臓を弾丸で打ち抜かれた時? 致死量の毒物を仰いだ時? はたまた挑戦する心を忘れ、未開の荒野を開拓する精神を失った時? 違う。夢を無くしたとき、

人は死ぬのだ。思えば君に出会うまでの僕は、夢を失い、心が徐々に、その働きを弱めていくのを自覚しながら、ゆっくり死んでいくだけの存在だったのかもしれない。

「実学を超えた、人間存在の深淵に迫りたい。心の奥底で人間を突き動かすシステムに触れたい」希望に満ちた心でミネルヴァの門をくぐった僕の心を現実という名の処刑器械は瞬く間に打ち砕いた。教授、級友、駒猫、学食のおばちゃん・・・駒場的価値観の一切が僕を落胆させ、これ以上なく失望させた。そうして僕は、金輪際「大学なるもの」への接近はするまいと心に誓い、ひとり渋谷駅前、TSUTAYAの2階のスターバックスで世界文学全集に向き合う日々を送った。18歳だった。

君と出会った切っ掛けは何だっただろう? 君と初めて交わした言葉は? あの夜、君は、何を見、何を考えていた? 語りたい。伝えたい。言葉は溢れ、記憶は足場を失う。行き場を失くした思いは走馬灯のように頭を駆け巡る。キーを打つ手は止まり、僕は天を仰ぐ。

こんなの、初めてだ。

本会議中の君について、ここに詳しく書くつもりは無い(千言万語を費やしても表せない、というのも事実だけれど)。コーネル、ワシントンD.C., オクラホマそしてサンフランシスコ。直前合宿を含めこの夏の君は、どんな鳥も飛べないほど高く僕の心を高揚させ、世界中のありとあらゆる光を集めても到底かなわないくらいまぶしく輝いていた。君から教えられたことは数え切れない。ただ反対に、僕から君に与えられたものが少しでもあったらどうかと考えると、少し、胸が痛む。

新学期を向かえた文学部の教室で授業を受けながら、友人と談笑しながら、あるいはひとり夜空を見上げ家路に着きながら、折に触れて思う。この夏君に会えてよかった。もし君に会えなかったら、あるいは僕は夢を見ることも無く、心を閉ざし、身体は冷え切ったまま、ゆっくりと生の機能を停止させていくだけだっただろう(かつて自分が、そうであったように)。君に出会って久しぶりに、自分の心臓が鼓動する音を聞いた気がする。

今僕は再び夢を見ている。2つの夢だ。1つは来年の第59回JASCを絶対に成功させること。これは第58回に参加した皆との約束でもある。そしてもう一つは外交官になること。サンフランシスコの日本大使公邸で会った齋木昭隆駐米公使から受けた鮮烈な印象は、僕に生涯を傾けるべき仕事の存在を教えてくれた。

こうしてまた夢を見られるのも、君のおかげだ。君は今までそうして来たように、これからもずっと、若い人の夢を育む場所であってほしいと思う。

最後に。

繰り返しになるが、言おう。

この夏、君に、会えて、本当に、よかった。

君の名はJASC。1年後実行委員として成長し、再び君に会えるのを心から楽しみにしている。

### 高橋裕美

JASCHOLIC---

*adj.* addicted to JASC/JASCers, caused by participating in JASC

*noun.* a person who loves JASC/JASCers too much and cannot easily stop thinking about it/them, so that it has become an illness

*FYI* This syndrome can be seen in most of (or maybe all of) JASCers. It is highly contagious among JASCers. Symptoms include insomnia during the conference, a fondness for discussion, and addiction to forums, your roundtable and your fellows. Patients with this syndrome often have subjective symptoms after JASC. The disease often changes patient's life. No treatment for this sickness has been found yet.

So.... JASCers!!! I need your help. Please take full responsibility for my disease caused

by you all. You can do this by sharing your opinions, stimulating my thought, and making me laugh and smile ☺ as you always did for a month!! Basically, you need to keep in touch with me throughout my life!!



### 長崎智裕

1か月に及んだ会議の最終サイトであるサンフランシスコを離れ、日本へと帰国する日を迎えた朝。それまでに身体に溜め込んだ睡眠不足と疲労からか意識がもうろうとしていた僕は、まったく「準備」が出来ていなかった。アメリカ側参加者と別れる準備、日本に戻るまでにこれまでの1か月の体験を整理し、ふり返る準備、そして第58回日米学生会議を終える準備。それでも、ぼんやりとしたままスーツケースを運び終え、JASCerひとりひとりに“とりあえず”のさよならの言葉をかけ始めた途端に流れ出して止まらなくなった涙は、この夏の体験がいかに自分にとって大切な意味を持つものになったのかを再確認させるものとなった。

日本とヨーロッパで生まれ育った自分がなぜ今、「アメリカ」なのか。単純に好奇心から「行きたい」という答えの他に、アメリカという良くも悪くも現在世界で最も注目を集めている国を実際に自分自身で確かめたいという理由があった。メディアや音楽、食べ物など自分の周りに氾濫する様々なアメリカ的なもの

を通じて間接的に触れてきたこの国を、もっと直接知り、理解したいという思い。このように感じていた僕の欲求は、会議でさまざまな場所を訪れ、参加者との交流を通じることでますます強まっていったように思う。

夏の1か月の間、71人の仲間と生活を共にし、四六時中誰かと一緒に食べ、飲み、語り、笑っていた。それは、同じ時間と空間を共有し、互いの感情と考えを通わせ、理解し合うというもの。JASCは僕にとって、今までに経験したことのないような特別な体験だった。「対話」を通じて互いを理解し合うという言葉はよく使われるけれど、第58回日米学生会議には自分にとって、それを超える何かがあった。単純に、言葉を通しての交流だけではなく、身体全体で感じ取ったJASCの日々は自分にとってかけがえのないものとなった。

日本とアメリカ。2つの国で学ぶ学生たちが、期限付きで集まり、融合するのがJASC。1ヶ月に及ぶ会議を経た今、家族のように親しくなった参加者たちが自分の周りにいないことに寂しさを感じると共に、ひとりひとりの存在がこれからの自分の活動の支えとなっていくことを感じている。会議終了直後にカリフォルニアでの留学生活が始まった僕にとって、日本とアメリカ、または世界のどこかで活躍している仲間がいるということは新しい生活を歩み始めている自分への励みとなるし、誇りに思える。これは、これから先も変わらずに思い続けることになるだろう。JASCer 72人の2006年の夏は終わったけれど、会議中に築いた関係を温め、更に深めていくこれからが本当のJASCの始まりなのかもしれない。

### 永田隆介

JASCの感想を文章化しようとする、どうもためらいが生じてしまう。何か安っぽくなってしまふからである。毎日を一生懸命過ごし、毎日様々な感情が掻き立てられる。そのような濃密な夏を簡単には表現しきれないこ

とと、それを消化しきれないことが原因にあるようだ。そこで、今回はまとまりを気にせず、ただ思うままに書き綴ろうと思う。

JASCに参加して一番の経験は個性ある素晴らしい仲間との出会いであり、それを通じて「人間の魅力」について知ることができた。彼らは固有の魅力に溢れていて、そのような仲間と約四週間を駆け抜けたことで、人を引きつけ、心を動かす魅力の素晴らしさを実感できた。そして、自分はこれが好きだ、これなら誰にも負けないという軸こそが人間の魅力を引き出すということも学んだ。それは、理系の大学院生でありながら、自分の研究に身が入らない自分にとって耳が痛いことであった。しかし、今の自分の中に研究を頑張ろうという気持ちがあらたに芽生えている。自分と異なる文系の世界を覗こうとしてJASCに参加したが、結果的に自分を見つめなおし、研究へのモチベーションへと繋がったのである。これから就職をどのようにするかは決めていないが、自分の軸を持った上で選んでいきたいと心から思う。

その他にもJASCにおいて多くの貴重な経験をした。異文化交流、勉強会、フィールドトリップ、ディスカッションなど挙げればきりが無い。それらの経験の持つ意味、可能性は計り知れないものである。しかし本会議を終えた今、その可能性を活かしたのかという自問に不安を覚えることがある。もっとあすれば良かったという後悔がついてまわるのである。そこで取り上げたいことは「我々はスタートラインに立つ学生である」ということである。今、真っ白な学生という立場で、JASCから多くの課題をもらった。それは知識やコミュニケーション能力であったり、生き方であったりする。これにより物事で最も重要な方向性、目標を定められたといえる。後は自分の軸を支えに、ひたすらに前に進むだけである。幸い、魅力に溢れた仲間という最高の羅針盤が自分には備わっている。何も恐れずに仲間と進める未来が楽しみである。

### 生板沙織

毎日の忙しい生活の中で、ふとラップトップの作業を中断し、別のファイルを開けて夏の写真を眺めてみる。同じような写真を含む数百枚の写真を何度見ても、飽きない。画面を覗き込んでいると、またあの場所に戻れるような気がしてくる。もしかしたら、その数分間は戻っているのかもしれない。

「私は、アメリカを心の底から愛している。」

いつも写真を見終わると同時にその想いがこみ上げてくるのだ。

運営に携わった1年間は実に早く過ぎ去ったが、あの短い時間に収まっていることが不思議であるほどの思い出が詰まっている。昨年の会議が終わりに近づくとつれ、私は「やっと終わる。日米学生会議は1回でいい。実行委員は絶対になりたくない。」と思うようになっていた。そんな私がなぜそこからまた1年間、日米学生会議に魂を打ち込むことになったのか。それは、アメリカを本当に愛していたからである。

私は日本で生まれ、大学に入学するまでアメリカで育った。そのため、国籍は日本人でも、心の中は常にアメリカ人だった。帰国してから、イラク戦争を受けて、同世代の若者が「反米」となったことに非常にショックを受けた。アメリカをもっと理解してほしい、そして好きになってほしい、という思いが徐々に強くなっていった。メディアに惑わされずに実際にアメリカに行き、「アメリカ人と触れることができれば、アメリカ人は戦争好き、横柄、傲慢だ」というステレオタイプを緩和することができるのではないかと思い、それを達成するには日米学生会議が絶好の場だと思った。

そのような思いから始めた実行委員だったが、本会議まで多くの失敗や苦い思いも味わった。私は選考を担当していたのにも関わらず、選考が一番忙しい時期にもう辞めてしまいたいと何度も思った。しかし、その都度、

11月に日本側実行委員で1ヶ月も費やして話合った会議の目的と理念を思い出した。各年度によって設けられる会議のテーマは異なるが、常にその根底にあるのが、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という日米学生会議創立以来の理念である。今、面倒くさいと思っている作業も、辛いと思える時間も、平和のためなら一つも無駄にならない。もちろん、私一人や実行委員16人で世界を変えることができるとは到底思わなかったが、その理念が私の原動力となったのである。

アメリカに対するイメージがどれだけ改善されたのか、はっきりと数値で表すことはできないが、一つひとつの写真に映し出される笑顔を見ていると、日米学生会議という小さなコミュニティの中だけでも平和が生まれたのではないかと思う。

最後に、本当に家族のように愛している実行委員に心から感謝を伝えたい。Thank you Yuta, Akiko, Machaaki, Eichan, Hatako, Hanchan, Philip, Sheehan, Yoko, Geoff, Kenchan, Loc!, Rachel, Benchan, Daichan, and Sydnie!! I LOVE YOU SO MUCH!!



### 波多野綾子

最初に断っておきます。この感想文は、非常に個人的な様相が強く出ております。と申しますのも、実行委員として、全体に言及した、

公的な・まともなものを残すべきかとも思いましたが、それは他のセクションにおいて行われております。この部分では、正直に自分の想いを残すこと、どんな人間が何を求めて参加しているんだろうとこのセクションを読むであろう次期参加を検討されている方々の役にもたつのではないかと思い、極めて個人的な感想を残すことにいたしました。

第58回日米学生会議実行委員へ立候補するかしないか。

昨年のもとの会議の最後で、その決断を迫られたとき。

一瞬も迷いはなかった、といえばそれは嘘になる。

個人的な事情であるが、休学をはさみ、在学を6年目にした私は、この会議と自分の将来目標を平行できるのか、とても不安だった。しかし、日米学生会議の理念とその事業に思いを馳せたとき、ふと、気づいた。この会議は将来への布石などではなく、私が人生を通して実現したいと思えることの直線上にあるものであった。自分に今できることが何かあるのなら。迷いはなかった。この会議を創るブロックとなること自体が、私が生きる理由の一部なのだ、と、純粋にそう思えた。

所詮は学生の会議、とそう考える人もいるかもしれない。その重みも意義付けも、一人ひとり異なるものであるだろう。しかし自分にとっては、この会議を生きることが自己実現につながった。逆にいえば、そうでなければ私はこの事業に参加していなかったと思う。

また同時に、私にとって、日米学生会議への挑戦は、自分への挑戦でもあった。

今まで、与えられることに慣れすぎて、与えることに積極的でなかった自分。

頭の中で考えることは得意でも、それを実行することが苦手だった自分。

1人で行動することは多くても、集団で、チームで行動することに、ずれを感じていた自

分。

吸収することではなくて、今まで自分が得てきたものを、知識を、チャンスを、喜びを、どうやったら周囲に、参加者に、社会に還元できるのか？

不満や愚痴だけ、口だけの人間には終わりたくない。でも、渦巻くアイデアを、どうやったら周りに伝え、協力し、効果的に実行できるのか？

試行錯誤の毎日。衝突、トラブル、ミスメイク。

自分のキャパシティの不足にいらつくことも、コンプレックスにさいなまれることも、単純作業に自分は一体何をしているのか、と思うこともあった。

それでも楽しかった。心から尊敬できる仲間がいたから。

参加者の、一人ひとりの笑顔を思い浮かべることができたから。

一日一日、育っていく会議が愛しくてしょうがなかった。

そんな日々は飛ぶように過ぎて、唐突に終わりを迎え、『日常の中の非日常』から日常に引き戻されて。今振り返ってみてどうだったかなんて、まだうまく言葉にできない。

自分は1934年からのバトンを次いで、時代を創っていかうと主体的に動いた過去の学生の熱い思いを少しでも、かけらでも次につなげたのだろうか。きっと、5年後？10年後？時が経たないとわからない。1つの組織の可能性にかけた自分の挑戦はまだ終わっていないし、その結論もまだでていない。

いや、どれだけときがたっても確定した「感想」なんて生まれてこないのではないかと思う。振り返ったそのとき、どんなところに自分があるかで、あらゆるものの見方は変わってくるだろう。

ただ今本当に確かに感じるのは、この会議を通して本当にたくさんの方がたに出会い、本当に様々なご支援やご助言をいただいたと

いうこと。やそれは、現在はもちろん、日米学生会議の創始者の想いや、過去の参加者の試行錯誤の歴史も含めて、全て。そして自分はまだそれに対してのお礼を十分にしきれていない。

どうすればいいだろう？

その1つは、自分自身が、自分がお世話になったような方々のような人間に成長すること。出会いは化学変化を起こす。化学変化を起こせるような人間になりたい。いつになっても変化できる人間でいたい。

そしてもう1つは、過去からいただいたこの美しいバトンを次代にしっかりと渡すこと。この社会と地球を持続可能な、そしてもっともっと、生きるのが楽しい場所にしていくこと。きっと幾年かあとに見返したら、恥ずかしくて笑ってしまうのかもしれないが、今の自分の想いは1つ。世の中のより多くの人、より多くの可能性と未来への希望に満ちた時代を創り、生きていけますように、そう願ってやまない。「伝統への回帰と私たちの挑戦」はまだ、未完。

最後に、主催の財団法人国際教育振興会や財団・企業のスポンサー、後援者の方々、お忙しい中講演を引き受けてくださった方々、そして1年間苦楽を共にした実行委員や参加者のみんな、この会議を創るため、実現させるためにお世話になった全ての方々に、心から御礼を申し上げます。



## 平岡萌子

私は今年の春専門学校を卒業し、大学に入り直した。周りの友人は働き始める人も多し中、まだ学生でいることを選んだ私の心の中では、極個人的な一大プロジェクトが密かに、そして着々と練られていた。それは、「学生の間にしかできないことをやりつくす」という、極めて単純なプロジェクト。そして、その記念すべき第一弾とも言えるのが、この日米学生会議だった。

それまで、学生が中心に何かを行っているという団体とは、ほとんど関わらないで生きてきた。私の勝手な想像で、そういう活動をしている人たちはきっと自己満足に違いないと、全く根拠のないイメージを作り上げていたからだ。そんなマイナスイメージを持ち続けたまま、たまたま日米学生会議のパンフレットや過去の報告書に目を通す機会があった。最初は、やはり自分とは関係ない世界に見えた。日米両国の学生が集まって様々な地を移動しながら会議を行う。確かに面白そうだが、そこから何か生まれるのだろうか。熱く議論を交わすということは一見価値あるものにも見えるが、結局自己満足に終わるのではないか。結局学生にはたいしたことはできないだろう。学生会議なんてものは、きっと自分とは違う世界の人たちがやるもの。物事を冷めて見る習慣のあった私はそんなことを考えていたが、知らない世界にはどうしても心を奪われてしまうもの。食わず嫌いではなく実際どんなものか確かめたくて、学生にだって何かができるという希望を捨てたくなくて、参加を決めた。

そして参加した結果。私の持っていたマイナスイメージは、嬉しいことにほぼ不正解、そして一部正解だった。一部正解だったと思うのは、日米学生会議を通して、学生が非常に無力であるということを実感したからだ。いくら真剣に力を注いでも、学生という立場でできることにはやはり限界があると思う。様々な好機が重ならない限り、学生に世の中を動かすような大きなことはなかなかできな



いだろう。しかし、だからと言って日米学生会議のような学生団体に大した意味がないかという、そのような考えはとんでもなく大きな間違いだった。

日米学生会議を通して得た数多くの素敵な出会いや経験はここに語りつくせるものではないが、たくさんの貴重な経験や些細な出来事、その全てを通して私の考え方は変わった。学生が集まって生み出されるものは、必ずしも形あるものでなくてもいいのだと、会議が終わった今は思う。私たち学生は無力だからこそ、あらゆる機会を逃さずに経験を積み、そこから学び、吸収していかなければいけない。同じ経験をして、人それぞれの感じ方があり、学ぶことも違うだろう。大切なことは、それぞれが得たものを、いかに後に活かしていくかということ。今回集まった72人は、それぞれに強い個性を持った素敵な人たちだった。その全員がこの日米学生会議を通して得たもの、そして漠然とした想いを、今後の人生に最大限活かすことで、この夏の会議の意義はこれから何百倍にも膨れ上がっていくのだろう。そして、72人全員がこの夏を通して感じたものを糧に成長し、様々な分野で将来社会に還元できる力をつけていけることを確信している。

このような貴重な経験をできたことは、実行委員を始めとした第58回参加者の皆と、日米学生会議を支えて下さっている多くの方々のおかげである。この感謝の気持ちを将来何らかの形にして返せる人間になるよう、ますます力を入れて残りの学生生活を過ごしていきたい。

### 廣瀬裕子

58th JASC が終わってもうすぐ3週間が経とうとしている。

今でも一ヶ月間、71人のデリゲートと共に学び、議論し、生活した経験を一言で表すことは出来ない。ただ思う浮かぶ言葉は“incredible”である。

私のJASCへの興味は12年間アメリカで育

ったという自分の過去から始まった。アメリカでは日本人として育ち、日本では帰国生として「中身は限りなくアメリカ人に近い日本人」として過ごしてきた中、どちらにも属していないというアイデンティティーに自分自身も疑問を持っていた。どちらの要素の方が強いのかを分析し、「日本人らしく」なろうと努力する中、私が見つけたのは、アメリカと日本の架け橋になりたいという思いだった。

JASCに参加し、具体的に日米間をつなぐことの難しさを感じながら、多くの場面で悩んだ。しかし、今振り返ってみるとJASCにおいては私が目指していた架け橋というものは必要なかったのではないかと思う。それはJASCer一人ひとりがお互いに interact していき、自ら関係を築いていったからだ。文化が違っても、言語が違っても、お互いが分かり合いたいという気持ちを持っていれば、分かり合えるのだと強く感じた。日米の学生が1ヶ月間共に過ごすことで、本音で語り合うことで、お互いを互いの国の国民としてではなく、「人」として試みることが出来る。

自分を分類しようとせず、ありのままの自分で“Just be yourself!”このことを fellow JASCers は教えてくれた。自分のありのままを受け入れ、そこから自分にしかないパッションで貢献していく。こうして初めて、他の仲間のありのままを受け入れることが出来る。1ヶ月前までは出会ったことがなかった72人が1ヶ月間、24時間を共に過ごし、最終日には一人ひとりが驚くほど愛しい人になっていた。家族になっていた。

同じ空気を吸い、暑さを感じ、言葉を交わすことで、時には衝突しつつ、感情をシェア出来ること。これは同じ空間を共有することによって可能であり、だからこそたくさんの刺激がある。Fellow 58th Delegates とだけでなく、スピーカーやアラムナイ、サポーターと空間を共にすることによって私たちはより多くの刺激を受け、他者を理解する力を鍛えた。今では一瞬一瞬が貴重に思え、一人ひとりを大切に思う。

JASC taught us to be ourselves, 100% and the

combination of our identities by working together with fellow delegates, alumni and all supporters creates something truly wonderful.

JASCers の教えてくれたことを胸に、まずは日米の架け橋となるような、お互いを受け入れる場を作ること、つまり JASC を続けていくことに精一杯力を注ごうと思う。



### 黄アラム

「そのときの出会いが  
人生を根底から  
変えることがある  
よき出会いを」

これは 相田みつをさんの言葉です。そして、私の好きな言葉の一つでもあります。初めて聞いたときには何も感じられなかったこの言葉が、ある瞬間から、私の人生を一番良くあらわしている言葉、一生胸の奥に大事にしまっておきたい言葉になっていました。もちろんたった1つの出会いで価値観がまるっきり変わったりする劇的な経験はまだありませんが、この22年間の道のりを振り返ってみると、自分が歩んできたこの道は他ならない「出会いの連続」だったのではないかと思いたくなります。親に人生を学び、先生に学問を学び、友達と喜怒哀楽の感情を分かち合ってきた。その一つひとつの出会いが、幼かった私を今の私に変えてくれたと言うことも、否定できない事実でしょう。正に相田みつをさん

の言葉の通りなのです。

うまくは言えませんが、誰であっても生まれた時から人生の方向性はある程度定められていても、実際にどの方向に進んでいくか、または目的地までどの道を選んで行くかなどの決定は、その都度、自分の判断と置かれている環境によって変わってくると思います。「何かを始めてみよう」、「チャレンジしてみよう」、「この道を行ってみよう」などの決心をうながすきっかけというのは、「人との出会い」から生まれて来るのではないのでしょうか。それは友達、先輩、先生といった身近な出逢いだったり、大学外、国外など、自分とは違う境遇にいる人との、全く新しい出逢いだったりもします。

私にこのような新鮮な出逢いの機会を与えてくれたもの、そして、何よりも私に未来の夢と希望をもたらしてくれたのはほかでもない、第58回日米学生会議でした。日本での最後の夏ということでもっとも充実した夏を過ごしかつた私はいろんな選択肢の中で日米学生会議を選びました。その理由としては、今まで参加してきた様々な学生交流の中で日韓のものをもっとも多かったことが決定的だったのではないかと思います。なにより多角的な理解を深めていきたくかったため、将来その重要なパートナーとなってくる日米を理解することこそとても大事だと思いました。日本人でも、アメリカ人でもない留学生が日米学生会議に参加することは珍しいことかもしれませんが、だからこそその珍しい機会を得られた私はとても幸運な者だと思いました。日米だけではなく、第三者としての見方、それを72名のみんなの共有できた気がし、とても嬉しい限りです。

人と出逢うたびに色んなことを学び、視野を広げ、選択肢を増やし、その中で何かを選ぶ。この繰り返しこそが人生の根底を成していると思います。だから積極的に第58回日米学生会議から得られた新しい出逢いをこれか

らも大切にしていきたいと思います。将来、韓国の外交官を目指している身として、日米学生会議に参加できたことは私の心の奥に一生忘れられない宝物として大事にしまっておきたいのです。

「とうとう世界の人口が60億人を超えてしまいました。

私たちが、世界中のすべての人と出会おうと思っても、それは無理なこと。なぜですか？

それは、私たちが1秒に1人の人と出会ったとしても、190年の年月が必要だから。

人と人との出会い偶然。

人と人との出会いは運命に等しい。

あなたとの出会いは私の一生の宝物。」

今までたくさんの出会いがありました。

国境を越えて多くの人と知り合うこともできました。

今までもそうだったように、これからもいろんな人と会う度に、自分をもっと多くの面で成長できるきっかけを必ず見つけられると信じています。

私のこれからの人生にも少なくない影響を与えてくれる第58回日米学生会議72名の参加者一人ひとりに一つひとつ感謝しながら、この感想文を終わらせて頂きたいと思います。

どうも有難うございます。

### 松田浩道

日米からのすてきな仲間とともにアメリカを旅行した1ヶ月間は毎日が本当に充実していて実りが多かった。”JASC is a life changing experience.”と会議のはじめのほうに聞いたときは「そんな大げさな」と思ったが、今思えば確かにそうかもしれない。今まで国際的な場で働くことなどほとんど考えていなかった私が外交官の方と話す中で大きな関心を持つようになったし、外国語で議論をする重要性に改めて気づいてはじめて留学をしてみたい

と考えるようにもなった。

英語での議論については、ゆっくり話してもらえばアカデミックな深い内容であっても十分議論が可能であると自信を持たれた反面、まだまだ自由に英語を使うには多くの訓練が必要であることも痛感した。会議中、語学堪能なデリゲートに刺激を受けたこともあり、向学心を奮い立たせることができた。これは語学に限ったことではなく、様々な夢を持って努力をしている友人の姿を見てとてもよい刺激を受けた。向学心も重要だが、何よりも多くの友人を得たことが心からうれしい。“JASC Family”はまさに一生の宝である。

最後に、個人的に特にJASCで実感したことをあげておくと、それは音楽の持つ力である。私は中高とコーラス部をやっていた経験を生かし、有志を募ってTalent Showの場でアカペラを歌うことを企画したのだが、これを通して国を超える音楽の力を再認識することとなった。アカペラの練習をする過程では国を超えて友情が深まっていく様子を目の当たりにすることができ、アカペラ練習以外の場所でも、さらっとピアノを弾くメンバーの周りに自然とみんなが集まっているのを見たり、クラシック音楽の話題でアメリカ側参加者と会話が弾んだりといった経験を通じて、音楽のすばらしさを実感した。特に、会議の後半で多くのメンバーと一緒に新しいJASC SONGを作ったことは本当にかげのない経験となった。私は幸運にも来年の学生会議に実行委員として参加する機会を得た。来年もぜひ音楽を通じて日米の絆を深めることに貢献したい。

### 三窪英里

“You deserve.”

会議終了の前日、来年のECになることが決まった私に対して、あるAECが繰り返しかけてくれた言葉である。「私も去年同じ気持ちだったからあなたの不安な気持ちはよくわか

るけど、大丈夫だから。」と彼女が目を見てゆっくり話してくれたことは決して忘れられない。この濃厚な1ヶ月間に会った全ての人々が私を大きく成長させてくれた。

春、憧れの日米学生会議への参加が決まり、事前活動として弁護士事務所や法務省を訪問したり、著名人の講演会に参加したりする中、私の知的好奇心はぐんぐん高まるばかりであった。しかし、いざ本会議となったとき、胸躍る一方で大きな不安に苛まれていた。それは、どちらかというところ積極的に他に働きかける性格でもなければ、英語力も十分とは言えない私が果たして会議にどう貢献できるのか全く自信がなかったからだ。

しかし、その心配は杞憂に終わり、疎外感やストレスを感じることなく本会議を過ごすことができた。JASCは私にとって常に挑戦し続ける場であったと同時に、自分自身の可能性を模索するチャンスを与えてくれ、そしてまたありのままの私を受け入れてくれた71人の素晴らしいJASCerとの出会いの場であった。

中でも分科会での経験が上記のことを印象づけた。アメリカ側参加者と一緒に一つの目標に向かって協働し達成するという試みは貴重だった。私の所属したGlobal Mobilityでは、難民、移民、マイノリティの問題を主に扱い、街頭で「アメリカ人の移民問題に対する意識調査」を行い、統計学を用いた分析はtangible resultとして成功した。時には日米間の問題の違いや考え方の違いに戸惑ったもののお互いがお互いの国を知る楽しさ、そして世界を知り問題を直視することの重要性を実感した。「多様な人種がいるアメリカでお互いをよりよく知ることによって差別が排除できると思うか。」という私の問いに対して「相手を本当によく知りたいなら、知らなくていいことがある。」というアメデリの意見は日本人との価値観の違い、問題の差を表しているように思えた。

今手元にある2冊の書きなぐったノートは、ときにアメデリに助けをもらいながら英語を必死で聞き取った結果であり、またJASCer

から届いた沢山の手紙は、この1ヶ月が決して儂く夢のように消える時間ではなく最高の時間を過ごした証として私の手に残っている。戦争メモリアルで共に辛い思いをしたこと、グローバルな問題について真剣に意見交換したこと、一緒にタレントショーで歌やダンスをしたこと...、振り返ると分ち合った時間すべてがJASCerに励まされ勇気付けられた。このような生涯の財産となる仲間に出会ったことに大きな喜びを感じる。この仲間がいたからこそ、私たちが未来に向かって考え、同じ苦労や悩みを共有しあい奮闘し続けることが非常に大切であり、将来的に社会貢献そして世界平和に寄与できる可能性をそれぞれが持っていることを感じられたと同時に、挑戦の中で新たな自分を発見する日々となった。この感動は言葉で到底表すことができず、自身の表現の陳腐さと言葉の無力さに落胆せざるをえないが、私の2006年の夏はこうして生涯忘れられないものになった。

最後に、これから1年間第59回ECとして、支えてくださるすべての方々へ感謝し、会議の成功に向けて精一杯努めたい。



### 宮崎あゆみ

22万円でアメリカに行ける。

私がJASCに参加しようと思った理由はそれだけだ。

1月なかば、テスト前にはじめて出席した授

業で偶然配布された JASC のリーフレット。

いま振り返ってみるとこの頃の私は京都から、学校から、そして日常生活から抜け出さたくて必死だった。全く興味の湧かない授業に飽き飽きして人間関係に疑問を抱いて体内時計がおかしくなって夜しか活動できないことに美学さえ見出していた。

JASC を経験して何が変わったか。周りから見たらきっと何も変わってないと思う。

「アメリカの生活リズムのまま日本に帰ったら早寝早起きが習慣になっちゃったりして。」  
「きっと国際関係学の必要性を見出してこれでもかってくらい学校行くんやろーな。」

なんて甘い幻想を抱いていたものの現実はやっぱりそんなに甘くはなくて相変わらず早起きもできないし。

ただ、言葉にはできないけれどやっぱり何か少しずつ変わっていて JASC は確実に私のなかに存在する。

ビーチサンダル、ベージュ、止まった腕時計、スケッチブック、ブルーベリージャム、道路標識、CD、電車、マグカップ、コーヒー、手紙、そして写真。

すべてが思い出すタイミング。



## 源飛輝

「JASC という夏が私に残したもの」

この文章は、爽やかな西海岸を発ち残暑のまだ厳しい関東平野に着陸してから、つまり私にとって初めてのアメリカに別れを告げて久しぶりの日本に戻ってから、51 日目に書かれたものだ。何も JASCer でサンフランシスコのラーメン屋に座っていた時、シアトルマリナーズのイチロー選手に居合わせたという偶然があったから背番号と同じ「51」にこだわったわけではない。ただ単に私の体内では未だにあの心地よいゆったりしたオクラホマタイムが流れているのであろう。本稿の編集担当者はワシントンにいたビジネスマンや学生のようにきっちりとしてテキパキ者なのだろうか。そうであればこのカウボーイ的まぐれな筆者と文章とがいらぬ心配をかけたかもしれない。"Oh, I'm sorry." それでも、ある程度の時間が経ってから書いたほうが有り余る興奮を除いて多少は冷静に書けるので、そういうのもそれはそれでいいことではないかとポジティブに捉えてみた。この流儀はクールなニュー Yorker に教わったものだ。

今回の訪米はこれまでの知識やイメージの確認の場となった。いよいよアメリカを好きにもなったし嫌いにもなった。日本のことが嫌いにもなったし好きにもなった。

そして面白いことにアメリカに行って英語が下手になった。これは周囲のレベルが一気に上がったからかもしれない。愉快で有能ないい仲間が一気に増えた。寝る間も惜しんでみんなとの時間を過ごしたから睡眠時間が短くなった。間違いなく 2006 年の 8 月は今までで一番寝ていない 1 ヶ月だ。

...と、ここまで筆の任せるまま徒然なく書いてきた。他にもアカデミックなこと、馬鹿みたいなこと、様々な感想がフツフツと沸いて出てくるのだが、頭の中で整理がつかない。言葉にできやしない。残念ながら私の気持ちとは裏腹にこの文章は長くなりそうもないとここで気が付いた。という

のも、文字に落とせば落とすほど皮肉にもそれでは言い表せないことに苛まれ、自分のボキャブラリーのなさを実感し、あたかもパンクしそうになるからだ（決してオーバーな表現ではなく）。それがまた歯がゆいのだが、充実という単語では収まらない、それ程のレベルの経験と財産を得たということの裏返しでもあろう。

夏の1ヶ月間、5月からの準備を含めれば3ヶ月間、全く違うバックグラウンドを持つ両国の色々な学生が共同生活をしながら、色々な場所で色々なことを話し色々な人に出会って、色々なアクションを起こし色々なことを通じて色々な経験を積み、そりゃあ色々なことが出てくるさ。この現象に終わりはなく、これからも続いていくのは間違いない。

何かを決めるということは同時に何かを切り捨てるということだ。そして今年の夏、私はJASCの一員としてアメリカの土を踏んでいるという選択をして、成功だったと思う。

感想を求められて結局出てきたのが「Without JASC なんてもったいなさすぎる！！」言葉足らずなのは十分承知の上だが、シンプルな表現が一番力強いのだと思うし、強い思いを形にしようすると、どうしてもシンプルな表現に収束してしまう。最終的な感想が通信販売の売り文句のような調子となり、我ながら苦笑いしてしまうのだが、本心である。

おっと、フランクからメールが来たぞ。なんと、日本にやって来るそうなの！

そうかそうか、こりゃ楽しみで仕方がない。それじゃあ、"See you soon!"

### 安田雅治

「刀屋ラーメン。」

それはサンフランシスコの中心部ユニオンスクエアの近くにあるラーメン屋、日本料理屋。味も気に入ったし、雰囲気もよかったし、SF

では毎日 commute してしまった。

自分たちのいたホステルから近かったこともある。

店員さんは、みんな日本人。でもサービスはアメリカ流。日本ではありえない会話も、そこがまたクセになる。

一番のお気に入り、スパイシーねぎラーメンのこってり味噌味。

天井、鯖寿司も

熱燗もよかった。house small を"ハウゼン"と間違えたのもいい思いで。メニューを逆さから見ていたし、他の酒はみんな"大関"だの日本のだったから。

日本酒とあげだし豆腐の組み合わせが最高かも。

最後の日には、一番愛想の悪かった店員さんと仲良くなった。

あそこに行くと毎回一組くらいはJASCerに会った気がした。

一番会ったのはJustin & Eunice かな。

この店であったことは自分の中でかなり大きかった。

自分は間違えていなかったし、これからの勇気にもなったし、何よりもっと正直になれるから。

JASCの自分にとっての財産はこういうことの集まりだったと思う。

"life changing experience"とはまさにその通り。ちなみに、実は刀屋ラーメン初日、SF到着日、

そこで本物のイチローに会って握手した。

あのままのイチローだった。

そして22日に帰国。

飽き足らず、成田からの帰り、なぜか船橋にて、有志で打ち上げしました。

もうそれから1週間になる。JASC後遺症はないけれど、でもさびしい。今日から新EC合宿。明日花火大会だからみんなに会えるかな。

やっぱりもう東京の景色も前とは少し違う気がする。



### 安田立

2006年8月20日の夜、すなわち58th JASC最後の夜、僕は幸せな気持ちに包まれていた。

英語力と一般教養（政治、経済、歴史、国際関係等）の不足から分科会や各種フォーラム、フィールドトリップにおいて内容がなかなか理解できず、会議に貢献できない苦悩の日々が続いていた。普段から医学の勉強のかたわら英語や一般教養の勉強を少しはしていたつもりだったが、会議に参加しているintelligentな学生達のレベルには到底及んでおらず、文字通りの挫折を味わったわけである。しかしながら、海を越えて日米の学生が本音

で1ヶ月も語り合うというこの素晴らしい会議に呼んでもらっているだけでも光栄なことであり、多少の劣等感を味わおうとも最後まで全力で喰らいついていこうという思いで毎日を過ごしていた。

8月20日の夜はJASCを締めくくるclosing ceremonyが行われた。講評のあと、58th JASC参加者の中から選ばれた59th JASCの実行委員16名が次回会議の概要を発表した。それを聞いていると「やっぱり実行委員を含め皆JASCの事が大好きで、この会議をより良いものにしていきたいという思いがあるのだな。そして、会議はもうすぐ終わってしまうけれど、ここにいるメンバー達は強い絆で結ばれており、JASCの歴史はこれからも続いていくのだ」ということを強く感じ、何とも言えないhappyな感情が湧いてきた。必死に皆に喰らい付いてきた1ヶ月は意味があったのだ。

思えば、この会議からは多くのものを与えてもらった。僕は「開発：貧困と発展」という分科会に所属し、5月の春合宿で初めて分科会メンバーに出会ってから、何を最終目的にし、どんなリサーチをし、どんな人に話を伺いに行くのか、貧困解決のためには何が必要なのかといったことを皆と考えてきた。それぞれタレントを持った集団の中で0から新しいものをcreateしていく喜びというのは何にも変えがたいものだった。分科会だけでなくもっとgeneralな話題、例えば自分のアイデンティティーとは何か、ホモセクシャルについて、台湾問題、同時多発テロ、沖縄の米軍基地、ネイティブアメリカン、といったことについても意見を交わしたのは大きくて貴重な経験である。あるいは、サッカーや踊り、クッキングといったノンバーバル・コミュニケーションを通して互いの絆を強くすることができたと感じている。

繰り返しになるが、多くのものを与えてもらいながら、自分から与えられるものはあまり無かった。それに関しては今後の人生においてゆっくりと恩返しをしていきたいと考えている。JASCを糧にこれから何ができるかが勝負である。最後に58th JASCを作り上げてくれ

たアメリカ側実行委員、日本側実行委員、スマートで優しくてユーモアに溢れたアメリカ側参加者、日本側参加者、JASCを支えて頂いている企業、団体の皆様に心から感謝したい。

### 山田裕一郎

人は弱い。

だから、光と影のバランスをとりながら懸命に生きている。

人は恐れている。自らの存在が定義されない世界に身を置くことを。

だから、不安定を満たす何かを求めて生きている。自らの実存を探すかのように。

今振り返れば、ぼくは常に逃げてきた。

大学生活への落胆、そこから生まれる虚無感から、海外へ逃げた。

現実の生活の怠惰さから、大きなことしたいと、第57回日米学生会議へ逃げた。

第57回日米学生会議、自らの弱さを隠すため、英語力の低さを言い訳に自らを語ることから逃げた。

2005年8月、僕は実行委員になった。逃げたくなかった。

2005年12月初め。実行委員の活動にメンバーの8人が疑問を持ち始めていたころ、いつものオリンピックセンターで緊急合宿を行った。夜更けまで語り、それでも納得できなかったぼくは裕太（井上裕太）にこうけしかけた。

「お前のビジョンを語れや。」

妥協はしたくないし、真剣だった。裕太はこう答えた。

「人はそれぞれ違った価値観を持っているんだ。その価値観を磨くの、それぞれみんなが人生の中でより多くの人と出会って、より多くの価値観と触れること。そして語り、だから、終わった後に参加者みんながそれを経験できるような会議にしたい。」

第58回日米学生会議はこの日から、まるでス

イッチが入ったかのごとく動き出した。

ぼくが出会った仲間は、こんなやつらだった。最高の仲間はこんな言葉をくれた。

「おれは、枠組みをつくる。おまえはそこに血と肉をつける。いいコンビだった。」  
JASCを通して、一番長い時間を過ごし、一番たくさん語った裕太。

「ふいりっぶ、英語うまくなったね。」  
英語の苦手なぼくをいつも優しく助けてくれた、JECダンスパートナーのさり（生板沙織）

「ソーシャルイノベーターズ、おつかれさま」  
企業と一緒にアポなしで飛び込み、共同から共創を生み出した戦友のはんちゃん（唐沢由佳）

「いま、メッセしていいかな」  
真夜中、いつも不規則な時間とともに広報戦略を練ったまちゃあき（井上雅章）

「ふいりっぶならできるよ。」  
いつも関西で一人活動するぼくを電話越しに励ましてくれたはたこ（波多野綾子）

「はじめは何回もけんかしたね。でも、今だからこんなに仲良くなれたのかな。」  
けんかばっかしたけど、それだけ本気でぶつかり合い語り合った明子（島村明子）

そして、会議の最後にえいき（国松永喜）がくれた手紙にはこんなことが書いてあった。  
「いろいろあったけど、あの時(実行委員に)誘ってくれてありがとう。…。"縁"とか"運命"とか"必然"とか、そういう言葉は嫌いだったけど、自分の人生にとってのこの時点でお前に出会えたことは大きな意味があったよ。」

2006年8月21日深夜、東京からの夜行バスの中。ぼくは涙が止まらなくなった。





### 由井啓太郎

「人間の不幸というものは、みなただ一つのこと、すなわち、部屋の中に静かに休んでいられないことから起こるのだ」(パスカル『パンセ』より)

たしかに居心地のよい部屋の中からも、世界は「書物」という窓を通して眺めることができるし、そこから得た知識をもとに人間は自分を支えるための精神の砦を築くことができる。あえて部屋の外に足を踏み出すことで、安定した砦を破壊しかねない、予期せぬ出来事や未知なる他者との遭遇という危険に身をさらす必要などないはずだ。ところが、人間は部屋の中にはじっとしてられない。外の世界に満ちあふれる「経験」を求めるからだ。

自分を超越した人や物との接触・交流は、自己の一貫性を確保してきたアイデンティティを破壊してしまう。そして、いったん破壊されたアイデンティティはもう一度再建されなければならない。地道で忍耐を必要とする精神的な作業によって。しかし、立て直したはずのそれも新たな出会いによって再び破壊されてしまう……。こうした絶え間ない破壊と再建のサイクルに身を置き続けさせ、人間の存在を常に未来に向かって開かせること、私はこれを経験と呼ぼう。そして、人間の成熟には経験が必要だと強く信じる。

第58回日米学生会議は、私にとって「経験」の場となった。日頃フランス文学を研究して

いる学生が、この会議に参加しようと思ったきっかけは、善い意味でも悪い意味でも国際情勢を牽引するアメリカという国を直接に見聞きたいと考えたからだ。実際に視野を広げることで、書物とにらめっこの日々のなかで習慣化してしまった抽象的な思考方法をマッサージしたいという気持ちもあった。しかし、ひと月近いロング・ジャーニーはすっかり私を変容させたのだ。経験は思いも寄らぬ場所へと私たちを導く。

まず、アメリカを一つのイメージとして定義しようという目論みが打ち破られた。アメリカという国は大きい。オクラホマでは残酷な暑さに苦しめられ、サンフランシスコでは夏だというのに上着なしでは過ごせない寒さに困惑した。気候の面だけではない、会議の中で出会ったアメリカの学生たちの多様さは「アメリカ」に明確な輪郭を与えようとするのをためらわせる。彼らは中東や北欧、ユダヤやハワイなど様々な民族的出自を背負い、それぞれが自由で個性的な意見や考えをもっているのだ。必死に耳で聞きとり、拙いながら全力で相手に投げかけた英語による会話のひとつひとつが今も記憶に残る。日本のアニメや漫画に興味があり、その知識が日本人をはるかに圧倒する者。彼とは、日本とアメリカにおける「サブカルチャー」の意味の違いについて議論した。アメリカの歴代の大統領の名前をすべて暗記し、その業績にも通暁している者。彼は沖縄の歴史を研究していて、さらに「空海」や「(学生運動に使用された)火炎瓶」などの単語を発しては、私たちを驚かせた。SF作家を目指し、すでにくいつか作品を発表したことのある者。古代ギリシアの叙事詩に登場するような絶対的な「英雄」が現代の文学にも必要なのかいなか、「靈魂」はどこに由来するのか云々、文学を愛好する者として国境を越えて精神と精神でぶつかり合う希有な時間を彼とは共有できた。

こうした学生との直接的な触れ合いを通して、私は国家としての断定的な定義付けがアメリカにはそくはないと感じた。世界を善悪の二分法で割り切り、デモクラシーの理念を

人類に普及させるという使命感で鼻息を荒くする一部の指導者だけが「アメリカ」を代表するのではない。私たちが出会った思慮深く人間的な魅力にあふれた学生たち、彼らのような国民一人ひとりが「アメリカ」のイメージを支えている。そして、それは個人の自由かつ尊厳ある生き方を何よりも大切にする国家としてのイメージではないだろうか。

そして、このような「個人」についての考察は、私自身にも向かってくる。今後日本において私はどのような個人として振る舞っていくのか？私の個人としてのあり方が、どんなにわずかであれ「日本」という表象を背負う宿命にある以上、私はそれに自覚的でないといけない。たとえば、そのような国民国家的なイデオロギーを批判する立場に身を置くとしてもだ。大学での文学研究で深い教養と見識を養い、それに裏打ちされた批判精神に照らして日本と世界の現実を見据えること。過去の歴史から学ぶことと未来について思索をめぐらすこと、決して車輪をひとつにすることなく双方のバランスをとっていく。そして、アメリカに関する自分の「経験」を一人でも多くの人々に語り伝え、日米学生会議の「経験」の輪をさらにもっと広げていくこと。これが今の精一杯の決意である。

最後に、実り豊かな「経験」の場を提供してくださった関係各位の団体、実行委員の皆さんに感謝したいと思う。そして、予期せぬ行動(?)ときらりと光る発言で会議を素晴らしいものにしてくれた旅の仲間たちに友愛と敬意を表したい。私たちの「経験」は、これからの未来に対して大きく開かれたところであり、いつか訪れるやもしれぬ「成熟」に向けてのロング・ジャーニーは始まったばかりだ。

### 王雄揆

飛行機の中での12時間、太平洋の海を眺めながら、この1ヶ月間のことをいろいろ思い浮かべてみた。

アメデリと最初に会ったコーネルの寮で

ルーカスが僕の名前を持って『ウンギョ〜』っとか言って迎えてくれた。ルーカスの第一印象は、『ヤベッ、イケメンじゃん』だった。それが僕のJASCの始まりだった。

そこから、JASCは僕が乗っていた時速900キロの飛行機よりも速く一つのパノラマのように、そして、思い出を積み重ねながら、飛んでいった。

コーネルでのドッジボール、その後のサッカー、そしてクライマックスだったのは10メートルぐらいの橋からみんなで川にジャンプしたこと。数えられないぐらいいっぱいあったりセブション、バーベキュー、また、RT時間にファイル忘れてコーネルのキャンパスで一人で迷ったことか〜。

ワシントンではやっぱりホステルが一番記憶にのこる。でも、今考えるとそのおかげで、思い出がもう一つ増えたからなんかありがたい。ミュージアムに行って、ポーちゃんと一緒に公園ですわり、ジャスクラブを語ったのも、すごく楽しかった。

オクラホマでは、みんなが披露してくれたタレントショー、僕はスキットとアカベラやったけど、JASC中、一番一生懸命だったかもしれない。今でもアカベラやった人には感謝しているし、『最高だったよっ!』っていってあげたい。そして、ホームステイでアメフトを始めて見に行ったことも思い出となっている。

最後のサイトであったサンフランシスコは、僕にとってはみんなとの別れを準備する期間だった。最後のフォーラムでみんな頑張っていた姿が今でも頭の中に生々しく浮かぶ。アダムが作曲したJASCソングをファンちゃんと一緒にレストランで歌詞を考えたことも思い浮かぶ。

そして、成田空港に到着した。だが、JASCは最後まで僕にスリルを感じさせた。その主人公はハタコ!! なんかパスポート忘れて、ちょっと面白かった。

そして、最後の最後、パーマンの最後の言葉で58th JASCは終わった。

みんなお疲れ様でした。